

戦後70年戦争体験文集

平成27年6月

栃木市

先の大戦から70年の月日が経ちました。この間、日本は戦争を
ほうき放棄し、平和国家としての道を歩んできました。私たちは平和を
きょうじゅ享受してきましたが、一方で戦争のひさんきおく悲惨な記憶は風化しつつありま
す。再び過ちを繰り返さないためにも、戦後生まれの、戦争を知ら
ない世代の平和意識の低下・きはくかけねん希薄化が懸念されるどころです。

この度、文集を作成するに当たり、戦争体験者のこうれいかきぐ高齢化が危惧さ
れる中、22名もの方から手記をお寄せいただきました。中には自
分たちこそが、戦争を語れる最後の世代であるという使命感に駆ら
れて、初めて他人につらい体験を伝えるという方もいらっしゃいます。

平和への願いが込められた、この貴重な体験談が、読んだ人の心
を動かし、戦争の悲惨さ、平和の大切さについて考えるきっかけと
なれば幸いです。

平成27年6月

栃木市長 鈴木 俊美

非核平和都市宣言

わが国は、広島・長崎に投下された原子爆弾による世界で唯一の戦争被爆国です。多くの犠牲のもとに戦争の悲惨さ、平和の大切さを学んだ日本国民は、憲法に恒久平和の理想を掲げ、その実現に努めてきました。

しかし、世界各地に核兵器が存在し、人類はその脅威にさらされ続けています。さらに、わが国では東日本大震災による原子力発電所の事故が発生し、再び放射性物質の被害と向き合うことになりました。

栃木市は、豊かな自然に恵まれ、歴史と伝統に育まれてきたまちです。このまちを誇りに思う栃木市民は、核兵器の脅威のない平和で安心して暮らせる社会の実現を求めて自ら行動し、未来を支える子どもたちに戦争の悲惨さ、平和の大切さを伝えていくことを誓います。

そして、核兵器の廃絶と平和で安心して暮らせる社会の実現を全世界の人々に強く訴え、ここに栃木市が「非核平和都市」であることを宣言します。

平成24年3月1日

栃木県栃木市



戦争体験文集 ～ 目次 ～

1. 砕 ^{くだ} かれた青春 (ソ連抑留 ^{よくりゅうき} 記)	……	秋元武夫	……	1
2. 学童疎開 ^{そかい} の記憶 ^{きおく}	……	伊藤照代	……	7
3. 東京大空襲 ^{だいくうしゅう} 体験記	……	伊藤稔	……	1 1
4. 青春 ^{きせき} の奇跡 ^{きせき} (軌跡)	……	猪瀬昌紀	……	1 7
5. 外地で戦争を体験した母との思い出 — 夫と妻は針と糸、親の恩は順送り —	……	大久保愛子	……	2 3
6. 軍人からシベリア抑留 ^{よくりゅう} 体験	……	大出泰司	……	3 1
7. 戦争体験記	……	押田澄子	……	3 7
8. 危険文書 ^{いんとくざい} 隠匿罪	……	菊地明子	……	3 9
9. 二度と戦争を起こさぬために	……	熊倉三朗	……	4 3
10. お母 ^か ん！ボク、頑張 ^{がんば} るよ！	……	小松義邦	……	5 1
11. 戦争は「ノー」それは今でしょう	……	柴田昭三	……	5 5
12. 飢 ^う えに苦しみ、空襲 ^{くうしゅう} におびえた日々	……	白澤イト	……	6 1
13. 「戦争体験」に思う	……	白沢英子	……	6 5
14. 戦争を友にした小学生の頃	……	杉浦初江	……	7 1
15. 私の大東亜 ^{だいとうあ} 戦争	……	鈴木明子	……	7 5
16. 宇都宮 ^{くうしゅう} 空襲	……	関口喜美子	……	8 1
17. 語り続けたい原爆 ^{げんぱく} の悲惨 ^{ひさん} さ	……	高橋久子	……	8 7
18. 戦争体験語り継いで	……	田村立吉	……	9 1
19. 戦時中の思い出	……	堀江宣男	……	9 7
20. 飛行機操縦訓練中の事故	……	水谷郷	……	1 0 3
21. 宇都宮大空襲 ^{くうしゅう} を体験して今思うこと	……	山口スミ	……	1 0 9
22. 終戦の思い出	……	若松義郎	……	1 1 5

※ 掲載順は氏名五十音順といたしました。

「砕かれた青春（ソ連抑留記）」

秋元武夫

昭和19年8月15日、陸軍特別操縦見習士官として宇都宮飛行
学校に入隊する。以降前橋、立川、満州の佳木斯飛行場、哈爾濱の
航空司令部、公主嶺の第二航空軍第一教育隊等転々とし、そこで私
達は、玉音放送により戦争が終わったことを知る。8月17日、吉
田少佐のもとで列車にて南鮮へと発車した途端、ソ連軍により突如
停車を命ぜられ奉天駅北の文官屯駅で待機することになり武装解除
が行われた。隊内は一挙に「穏健派」と「交戦派」に分かれ、離隊派
も出る。私は交戦派の五本大尉の指揮下に入る。八路軍（※1）や
満人（※2）と対敵行動を行い、高粱畑を逃げ隠れし、ついに力尽
きソ連の軍門に下る。その行動中、泥に塗れた日本婦人の遺骸に遭う
が、私達も手の施しようもない。高粱を刈り遺体を覆って別れを
告げた。この間、吉田少佐は敵状を見に行き帰らず、塚本中尉は
大腿部に被弾し手投弾により自決、隊員も少なくなり、奉天の鉄路
学院（日本兵収容所）に入らざるを得なくなった。ここで見たのは
顔を黒くし、坊主頭の軍服を着た若い女性、ソ連兵が見回りの時は

私達戦友の陰にかくまったが、私達が黒河に向かった後はどうな
たか。また、柵を乗り越えようとして射殺された日本兵、地獄。

一、黒河へ・・・

奉天駅から貨車で黒河へ、私達の所持品をソ連兵は有無を言わさ
ずひったくってしまう。扉は鍵がかけられ、40人詰め^づの貨車は用
便も儘ならず風に攻められた毎日である。黒河は、多くの日本兵が
黒龍江を渡る前に泊まったため、燃えそうな物は皆無、北満の10
月は寒い。戦友と肩を寄せ合^かって過ごした1週間、誰が歌い出した
か「国境の町」

◎暖をとる術なき黒河星月夜

二、シベリア鉄道・・・

黒龍江を渡ればブラゴイチェンスク、道路は、玉石を並べてコン
クリートを流しただけ、軍靴ではとても歩けない。靴下を靴にかぶ
せやっ^{はや}と貨車にたどり着く。ソ連人は「エー、ヤポンスキー」と囃し
たてる。「死すとも捕虜の辱め^{はずかし}を受けるな」と教育されてきたが、
今は何をも考えている余地はない。

三、貨車で・・・

何時間も停車している。止まったと思ったらすぐ出発する。用便

も給食給水も不定期。その合間^{あいま}を見ての用便、時には屍^{しり}もふかずに飛び乗る者、糞^{ふん}を踏^ふんづけたまま引き上げられる者、また、走行中の放尿^{ほうにょう}は後の貨車^{きり}に霧^ことなって飛び込み、前の貨車のものは飛び込んでくる。

どこに向かって進んでいるのか^{まった}全く不明。太陽の位置で西に向かっていてのは確実となる。誰^{だれ}かが「海だ」と、海？バイカル湖^こ？

◎帰れぬと覚悟^{かくご}して見しバイカル湖^こ

ふる里^こを恋ふ夏服のまま

四、タシケントへ・・・

太陽の位置から貨車は南下^{ようす}している様子。そして作業地のタシケントへ着く。12月間近^{まちか きび}、厳しい寒さは無さそう。煉瓦^{れんが}を焼く窯^{かま}が住み家である。

ベッドは木製^{もくせい}の2段で通路の両側に並んでいる。収容所^{なんきんむし}は南京虫(※3)と共存で、寝^ねにつく時^つから南京虫^{なんきんむし}との戦^{いくさ}が始まる。ある夜、2階の戦友が「秋元、来てみてくれ」と。2人で触^{さわ}ってみた。寝る時までは元気だったのに！作業場での彼の話^{さくや なんきんむし}「昨夜は南京虫^{すご}に凄く食^くわれた。亡^なくなった友にいたのがみんな俺^{おれ}のところに来たらしい」と。

五、作業・・・

煉瓦^{れんが}作り、鉄の車の一輪車を鉄レールを走らせての作業である。

土運びはまだ良い。焼けた煉瓦^{れんが}の窯^{かま}出し、これがひどい。熱気^{もつもつ}と濛々

たる粉塵^{ふんじん}に病^{たお}に倒れるもの、帰国後^{りょうよう}も療養^{りょうよう}せねばならぬ戦友もおつ

た。一輪車の操作は技術^{よう}を要した。

六、治療・・・

薬は帰国まで見たことはない。持っていた“ライオン歯みがき粉”

は貴重品で、傷にはすり込み^こ、腹痛^{ふくつう}、風邪^{かぜ}にも効いた万能薬^きである。ばんのうやく

それが無くなった後は薬は全くなく、腹をこわした時は木炭を用い

た。健康診断^{しんだん}は月に一回、女軍医^{しり}が尻^{つま}の皮を摘み、早く戻れば労働

可である。

七、食糧等・・・

普通^{ふつう}は黒パン300グラムというが、燕麦^{えんぼう}の皮の混ったすっぱい

パン、そこに塩づけしたキャベツを湯^{もど}で戻したスープ少々、粟^{あわ}や

玉蜀黍^{とうもろこし}の粒が入っていたら上の上で、ノルマが達成できなければ減

らされてしまう。暗い灯^{あかり}の下での配分係は命がけで行う。

◎パン分けに鋭^{すど}い眼^{まなこ}懐^{ふと}手^{ころで}

正月^{ほりよ}や捕虜^{ひとわん}は一椀^{かゆ}ゆるき粥

八、雪隠^{せっちん}・・・

バラック建^{だて}の下に20個ほどの穴がある。これがトイレで、使用時間帯は作業前の同時刻、その異様^{いよう}さは筆舌^{ひつぜつ}ではつくすことはできない。

九、靴^{くつ}・・・

支給された靴^{くつ}は底が木、作業ができぬので、ベルトを合わせ平べったい靴^{くつ}を作って履^はいていた人もあった。

十、帰国・・・

昭和23年10月、ナホトカで迎^{むか}えの名優丸^{めいゆうまる}を見る。服装検査の時間が長すぎる。船内は復員兵^{ふくいんへい}が多く身動きできない。舞鶴港^{まいづるこう}が見えて来た。日本の緑、白衣の天使、嬉^{うれ}しきいっぱい、夢でなければいいなと思った。家では両親と妹が待っていてくれた。久しぶりの家での入浴、寿司^{すし}での夕食、日本は負けても、こんな美味^{おい}しいものを口にできるのはいいと思ったが、実は私のために少しずつ母がためておいた米であり、母は病^{びょう}床^{しょう}にあったが、私の帰国^{こくこ}の報^{ほう}を得て跳び起き、床を上げてしまったということでした。

※1 八路軍^{はちろぐん} … 日中戦争時に華北^{かほく}方面で活動した中国共産党軍

^{こうぐん}
(紅軍) ^{つうしょう}
の通称である。

※2 満人 … ^{まんしゅう}
満州民族のこと。

※3 ^{なんきんむし}
南京虫 … トコジラミのこと。吸血性の寄生昆虫。刺され
ると激しいかゆみが生じる。

「学童疎開そかい きおくの記憶」

伊藤照代

あの日から70年が経過した。忘れてはならない、忘れさせてはいけないことに「学童疎開そかい」がある。孫が当時の私のとし年齢になった時に思いを新たにした。

疎開そかいする朝、赤羽あかばね駅で手を振ふってくれた母の顔を私はずっと忘れていない。今、娘むすめがあれ程ほどの事態に直面したら、我が子をあんなに冷静に送り出せるだろうか、これが永久の別れになるかも知れない8歳さいの子を手放すことができるだろうか？

昭和19年7月、王子区堀船おうじくほりふな国民学校3年生だった私たちは大勢の人に見送られて汽車に乗り込んだけれど、楽しい遠足と思っていたのに母の目は真っ赤だった。ほかの見送りの人たちもみんな泣いていた。それが学童疎開そかいだなんてまだ低学年の私には分からなかったし、知らされてもいなかった。小さな駅で降りて随分ずいぶん遠い道を歩いて行った気がする。「興禅寺こうぜんじ」と言うお寺に着いた時は夕方で、蝉せみの音が覆い被かぶさるさるように感じた事と、庭の百日紅さるすべりの綺麗な花きれいの色を今でも不思議なほど良く覚えている。案内された本堂にはすでに東

京から荷物が届いていて、今日からは^{ここ}此处でお友だちと^{いっしょ}一緒に生活をするのだと、付き^そ添いの先生から初めて聞かされて、もう家へ帰れないのだと分かって悲しくなった。

戦争が激しくなってきた東京に住む3年生以上の学童は強制的に^{そかい}疎開することが決まった。^{いなか}田舎に身寄りの無い子供は「学童^{そかい}疎開」と言って、学校単位で地方のお寺などにお世話になり土地の学校に通い勉強をするのだが、私はその最年少組で6年生の女子と一緒に^{あかぎさんろく みはらだ}通った学校は赤城山麓の三原田国民学校で校舎は小さいが、庭がとても広かった。

^{しらみ}虱に悩まされた毎日、食べ物が満足に無くていつも空腹だった。家族に手紙を書くのが日課で、「お母さん、おばあちゃん、早く^{むか}迎えに来て下さい。泣かないで^{かみ}髪を洗わせるから、妹とけんかをしないから。戦地のお父さんは元気ですか？」など書きながらいつも^{はがき}葉書に^{なみだ}涙がこぼれ落ちた。^{ひきがえる}蟻蛙の鳴く真っ暗な夜が^{こわ}怖くて、東京が^{こい}恋しくてみんな^{ふとん}布団にもぐって泣いていた。

村の人たちに親切にされたこと。おにぎりやお芋を^{いも かく}隠れるようにして食べさせてくれた農家のおばさんやお友だち、土地の言葉や遊びで私たちの^{さび}寂しさを少しでも^{まぎ}紛らわせようと心を^{つか}遣ってくれた地

元の寮母^{りょうぼ}さんたちから、本当に優しくしていただいた。池の周りを走ったり、木の実を拾いに山に入ったりした楽しい思い出もあったが、でも、みんないつ帰れるか分からない東京を思いながら

一生懸命^{いっしょうけんめい}に生きていたのだ。

本土上空に敵機が来るようになり、空襲^{くうしゅう}で家族を失う友だちが出始めて言いようのない不安な毎日だった。戦後、家族も家もなくなって村に残った子供が何人かいたことを、大分後^{だいぶんあと}になってから知った。

群馬^{せたまぐん}県勢多郡三原田村^{みはらだむらかみみはらだ}上三原田^{こうぜんじ}の興禅寺。私にとっては生涯忘れることのできない大切なお寺であり、古い山門^{さんもん}と赤い百日紅^{さるすべり}の花や、後ろにそびえる赤城山^{あかぎさん}など、今でも時々夢に見ることがある。

弾丸^{だんがん}の飛び交^かう所だけが戦場ではない。戦争の意味^{おそ}も恐ろしさも知らなかった幼い私たちの、正に戦争だった「学童疎開^{そかい}」の日々。

いつもひもじくて、寂^{さび}しくて、不安だった。こんな戦場もあったと言うことを、その真^まっ直中^{ただなか}を生きてきた子供の目や、心で感じた事実を、私はどうしても語り伝えて行きたいと思っている。

「東京大空襲体験記」

伊藤稔

「ガラガラガラガラー」踏切^{ふみきり}で電車が向かってくるとき、ハッと記憶^{きおく}が蘇^{よみがえ}りおののいた事があった。この音が爆撃機^{ばくげきき}「ボーイング B29」が投下^{おやくしやういだん}した親子焼夷弾^{ちやくだんすんぜん}の着弾^{ちやくだん}寸前^{すんぜん}の音なのである。これから書き留^とめる話は誰^{だれ}にも信^{もら}じて貰^{もら}えないような東京大空襲^{だいくうしゅう}で爆撃^{ばくげき}を受けて、九死^{くし}に一生^{いっせい}を得^えた私の体験^{たいけん}記^きである。

当時^{たうじ}、私は本所区^{ほんじょく}（現在の墨田区^{すみだく}）錦糸町^{きんしちやう}に住^すみ、江戸川区^{えどがわく}の新小岩^{しんこがわ}駅^{えき}まで電車通学^{でんしゃつうがく}で関東商業学校^{かんとうしやうぎやうがく}機械科^{きかいく}の1年生^{いちねんせい}、13歳^{さい}だった。通学^{つうがく}の服装^{ふさう}は、ズボン^{ずぼん}の上にゲートル^{げとる}を巻^まき編上^{あみあ}げの靴^{くつ}、さらに鉄兜^{てつかぶと}を背^せ中に背負^{せお}うといういでたちで、常時^{じやうじ}空襲^{くうしゅう}に備^{そな}えていたのである。教科^{きやうこ}も「教^{きやう}練^{れん}」と称^{しょう}して軍事訓練^{きんしけんれん}が時間割^{じかんわり}に組^{くみ}込まれ、先生^{せんせい}は軍^{いくさ}から配属^{はいじゆく}された教官^{きやうかん}で非常^{ひじょう}に厳^{げん}しい教育^{きやういく}であった。

今^{いま}から70年前^{ななじゅうねんぜん}、昭和20年^{しやわにじゅうねん}3月9日^{さんがつくにんか}の深夜^{しんや}に始^{はじ}まり翌朝^{あしたあさ}にかけのこ^このである。戦^{せん}況^{きやう}もいよいよ敗^は戦^{せん}の色^{いろ}が濃^こくな^なった頃^{ころ}、敵国^{ていこく}の航空母艦^{くわうくうぼかん}が太平洋^{たいへいやう}沖^{おき}に停泊^{ていはく}するようになった。艦載^{かんさい}戦闘機^{せんとうき}の「グラマン^{ぐらまん}」や「カーチス^{かーちす}」などが、母艦^{ぼかん}から飛^とび立^たち我が国^{わがこく}の領空^{りやうくう}に接^{せつ}

近すると空襲警報が発令され、同時に我が国の時速500kmを誇る「零式戦闘機」が迎撃して空中戦となった。また敵爆撃機「B29」の襲来は高度1万mの上空なので肉眼では発見が困難であるが、錦糸公園内にある軍用基地の聴音器が感知して、直ちに高射砲で迎撃した。弾が命中すると4発エンジンから煙を吐きながら真っ逆さまに墜落、搭乗兵士は落下傘で「ふわふわ」と降下してくるが、銃で武装した憲兵隊員がオートバイで着地点へ緊急出動するなど、戦場さながらの情景が日常茶飯事であった。もはや、怖いなど思ったことも無く、近所の人達とその状況を眺めているほど慣れっこになっていた。

ところが、3月9日火曜日の午後11時45分に警戒警報のサイレンが鳴った。まだ勉強中だった私は、眠りに就いていた家族全員を起こして避難に備え服装を整えた頃、空襲警報発令と同時に突然、油脂焼夷弾の親子弾に見舞われた。親子弾と言うのは、1個が上下3段に12発ずつ弾が収められ、投下後に数秒で36発に分裂して着弾するため、地上では広範囲に大火災となる驚異的な弾である。それが着弾と同時に家の中へ向かって、「ドーン」と炸裂して1mぐらいの火炎を噴出した。咄嗟にその焼夷弾を夢中で取り上げて道

路上へ^{ほう}抛り投げたが、^{こうはんい}広範囲に^{ちやくだん}多数着弾したため、付近の家屋全体に火が付いて大火災となった。「もうだめだ」と思った。

父は、^{さとう}砂糖類の^{おろししょう}卸商を営んでいたが、^{けいかい}地域の消防団員として警戒警報発令と同時に消防署へ出動していた。私たちは、母が^{ようじ}幼児を背負い兄弟3人とともに、なぜかバケツと^{ふとん}布団を1枚ずつひきずって燃え盛った家から^{ひなん}避難を始めた。^{じゅうたんぱくげき}絨毯爆撃の始まりである。

近くの^{きんし}錦糸公園は木に登ると野球場内が見えたが、中に^{どのう}土嚢を張り巡らして^{たんしょうとう}探照灯1基、^{ちょうおんき}聴音器1基、^{こうしゃほう}高射砲2門を備えた軍用基地になっているため、公園の周囲約100メートルほどが^{そかい}強制疎開で、家屋が^{とりこわ}取壊されて空き地になっていた。その^{ほうくうごう}共用防空壕に^{もぐ}潜り込んだが近所の^{ひなんみん}避難民が数十人もひしめき合って、何やら^{きょう}お経をあげ手を合わせて^{ふんいき}異様な雰囲気であった。間もなく警防団員が来て大声で「そんなところに入って居ちゃ焼け死んじやうぞ、早く^に逃げろ」と^{どな}怒鳴ったのですぐ飛び出したが、公園には軍の基地があるので、なお危険だと思い、^{どだいいし}空き地に^{かけ}積み重ねた解体家屋の土台石の陰に家族5人が身をひそめた。そこには消防車^{しょうかせん}がいて気強く思ったが、間もなく^{しょうかせん}消火栓の水圧が落ちて水が出なくなり、消防士が「水が無い、もう^{だめ}駄目だ逃げよう」と言って消防車に乗り込み行ってしまい心細

くなった。すでに、あたり一面は火の海であった。その頃、わが軍が無抵抗となっている空の煙の隙間から、爆撃機「B29」が500mぐらいの低空飛行で巨大な姿を見せていた。身边には熱風が台風のように強く吹きまくって火の粉が舞い上がり、布団が燃えながら転がるように飛んで行き、さらに、建物からは焼けた赤紫色のトタンが飛ぶなど、想像を絶する現象が目前で起きていた。煙火でむせて呼吸が苦しくなり消火栓からチョロチョロと出る水をバケツに受けて、袖を濡らしながら鼻に当ててしのぎ、衣服の内側まで入り込む火の粉を払い除けていた。そのとき強風のなかを近所のタバコ屋のお婆さんが、煙に巻かれながら這うようにして逃げ延びてきた。そこで息が絶えたのか倒れ込んで間もなく裾から火が燃え上がった。私からは僅か2mぐらいしか離れていない所であるが、自分も息苦しさと家族の火の粉を払うことで精いっぱい、助けることもできずにいるしかなかった。

夜が明けてから、やがて熱風が収まり涼風に変わったので、辺りを見渡すと建物はほとんど焼失して残骸すら無く一面灰と化し、至るところで逃げ切れずに焼死や窒息死した遺体が折り重なり異臭を放っていた。その時まで、死ぬか、助かるか、などと考える余裕

も無かったが、「あァ、やっと助かったんだ。」という実感が湧いてきた。

父とは、錦糸公園内の決めていた場所で再会を果たすことができたが、もう此処には戻るところは無い。しばし茫然としていたが両親の田舎へ行こうということになった。

交通機関は、全線不通で歩く方法しか無い。8時頃と思うが、とにかく田舎へ向かって歩き出したが、街の曲がり角ごとに数人が黒焦げの様相で折り重なっており、川の中は多数の水死者で悲惨を極めていた。北千住の大橋端まで来たとき婦人会の方の炊き出しおにぎりを頂き、あとは黙々として歩いたが着の身着のまま、体ひとつで食べるものも無く夜になって疲れ果て、21時頃越谷で警察署の宿直室に泊めて貰うことができた。そして電車が開通した12日に栃木へたどりついた。

この大空襲では、約10万人の犠牲者が出たと報じられた。私も生まれ育ったふるさとや、幼馴染みの多くを失ってしまった。目前で近所のお婆さんを助けることもできなかった。これらの事実は大きな印象として残っており絶対に生涯忘れることのできない記憶である。戦争は天災ではなく人災である。この貴重な体験は、永久

に語り継^つがなければならないと思っている。

「青春の奇跡（軌跡）」

猪瀬昌紀

朝鮮総督府鉄道局鉄道員として、北朝鮮の平壤（今のピョンヤン）で18歳（昭和20年）のとき終戦、同時に天地が引っ繰り返ったようで、仕事は無くなり、住んでいる寮からは追い出され、一般の収容される身となり、購買所（空部屋30畳位）に50人くらいが入った。9月でしたがコンクリートの土間にごろ寝で過ごしました。食事はとうもろこしの蒸したものの茶碗1杯を1日2回、腹が減るので近くの野菜畑から“とうがらし”を採ってそのまま食べた。そんな記憶が残っています。

10月に入り、寒さが出てきたので、独身者（朝鮮語で「チョンガー」といいます。）は全員揃って朝鮮人合宿（寮は朝鮮人が入っている。）に移りました。

オンドルのある土造りの長屋住宅で冬の到来を待つことになったのです。（オンドルは土床の下に煙が通る路があり、煮炊した熱が床を伝って暖房となるもの）布団は無く、着の身着のまま過ごしたのです。

毎日働ける者達は、水汲み、薪割り、炭殻（石炭の燃えかす）積み等の賃働きで報酬を得て、全員掘出して食糧を買い生活していました。

その時期に突然、私に呼出しがあり、前歴使用と機関車乗務の手伝いとのことで技術者のみ平壤機関区に集まり、仕事の内容を説明される。（機関車回収の人出が足りないから手伝う。修理の上基地へ集める。）修理技術者、機関車乗務員は40～50歳、若手は18～19歳で缶焚き、20～30歳代は応召または特別徴用で皆無。

各駅で動かなくなった機関車（理由はソ連軍の指揮でどこまでも運転させられるので、機関車乗務員（朝鮮の人達）は途中で逃げ、家族のもとへ戻るため、車両はそのまま）を我々が回収にあてられたのです。

運転作業は主に貨物列車、ソ連軍の指揮のもと、機関車に同乗され、自動銃を持ち「ダワイ（ロシア語、「行け」の意味）」と指示される。ラボータ（ロシア語、「仕事」の意味）の見返りに米と塩サンマが支給された。その米がもち米で毎日毎日そのご飯と塩サンマの食事にはうんざりしたものです。北朝鮮の各地“陽徳、高原、元山、威興、清津”回り乗務を続けていました。冬は寒いが機関車は火を

焚^たいているからなんとかしのげました。

昭和21年9月下旬、内地引揚げ^{ないちひきあげ}の通知が入り、手荷物をまとめて引揚者^{ひきあげしゃ}の集団に入り、南朝鮮^{みなみちようせん}の38度線^こを超えるまで歩くのだと指示に従い徒歩行が始まったのです。朝、夜明けとともに歩き出し、日が暮れるまで、野宿を重ね、言語に絶する苦しみを味わい、時には通行税といい現地人から金品をまきあげられ、病人は置き去り、死人は見捨てられ、生き地獄^{じごく}とはあのことだと、今でも脳裏を離れません。人間として生きてきてあのような場面^あに遭うことは今後絶対あってはならないと思います。

38度線を目の前にした頃^{ころ}、いろいろ注意があったのですが、夢中で道路を歩きました。“見つければ撃たれるぞ。”その声も聞きましたが、そんなことはわかりません。夢遊病者^{むゆうびょうしゃ}のようだったのでしょう。開城^{かいじょう}の収容所に入りただ生きていくというだけ、便所は長い堀^{ほり}に男女混合で使用し、拭く紙は新聞紙が切って下げているのを使用前に取り使った。死人が出てもその片付けはジープの後の牽引車^{けんいんしゃ}に山と積まれ運んでいました。

開城^{かいじょう}収容所の食事はとうもろこしの油しぼり糟^{かす}（丸い大きなもの）を煮^にて、1日2食（空き缶^{かん}）で手で取って食べた。量は少ないが、一粒^{ひとつぶ}

ひとつぶ ひとつぶ か たいざい
一粒と言っても粒は無いものを、噛みしめ味わった。3日間滞在し、
いんちよん けいじょう いんちよん
仁川収容所へ移動となり、トラックに乗せられ京城を通り、仁川
収容所へ着く。この食事はうどんとは名ばかりで、ゆで汁に数本
あるだけ。汁を吸って食事1日2回。このような食事でしたから、
弱いものは死んでしまいました。

なんせん しょくりょう こうかん
南鮮に入ってから10数日が過ぎ、手持ちの金品は食糧と交換
かいむ いんちよん
し皆無、体一つが残りました。仁川収容所では来る日も来る日も材
木の上にあがり、港の船をながめ、帰国を待ちました。1週間位し
て帰国乗船の知らせがあり喜びあったものです。仁川港は遠浅との
こと、おき ひきあげせん うれ
で、沖の引揚船まで小型船で送られ、やっと帰れる嬉しさがこ
みあげてきました。貨物船で私達若者は船底が割当て場所となり、
むしろしき ね かんばん
筵敷の上で寝起き、便所は甲板上の船外仮設で下は海、船底からの
のぼ ふうろ かんばん
昇り降りも大変。また風呂も甲板上でシートで囲われ青空天井。体
がかゆいので海水風呂に入った。(透明度ゼロ) そのかゆさが“かい
せん (疥癬)” だったのです。帰国して難病で、毎日硫黄風呂に入
り、1カ月位で治りました。

船内での食事は“とうもろこしがゆ”やはり1日2食。内地が見
え明日は上陸できると皆喜んでいましたが、検疫の結果(保菌者が

いる) 2週間の港外隔離こうがいかくりとなり全員がっかり。検疫けんえきが解かれ、やっ
と佐世保させほに上陸し、旧兵舎跡に入りDDTを頭からかけられ、食事は
さつま芋いものむしたもの、衣服が支給(旧軍服)され、旅券りょけんと一時
金をいただきそれぞれ個々に別れ故郷を目指しました。大阪駅で初
めて白米のおにぎりを食べ、嬉うれしかった。

以上が、かいつまんだ記憶きおくの点、もっといろいろな苦しみをした
のですが割愛かつあいさせていただきます。

「外地で戦争を体験した母との思い出

— 夫と妻は針と糸、親の恩は順送り —

大久保愛子

私が数え年5歳^{さい}の時、教師であった父の転勤先である満州^{まんしゅう}へ一家そろって引っ越しました。「『夫と妻は針と糸』、妻は夫の行くところへは何処へでも行くことが、昔の女の勤めだった」と後に、母は言っていました。

その頃^{ころ}奥地^{おくち}の開拓団^{かいたくだん}は平和で、父、母、次兄、私、それと生まれたばかりの妹の5人で生活をしていました。長兄と姉は、中学校、女学校に入っていたのでハルピンで寄宿舍暮らしでした。母も和裁教師の仕事が忙しくて大変だったとは思いますが、穏^{おだ}やかな毎日を送っていました。ただ一つ、悲しい出来事がありました。それは、1歳^{さい}になったばかりの妹が、肺炎^{はいえん}を患^{わずら}って死んでしまったことです。村にお医者さんは1人いましたが、整った設備^{じゅうぶん}も薬もなく、充分な治療^{ちりょう}を受けずに死んでいった我が子を思う母の気持ちはどんなだったでしょう。このこと以外はとても幸せな家庭でした。

しかし、戦争はすべての人から幸せを奪^{うば}っていきます。昭和20

年、私が小学校3年生の夏、ソ連の参戦により私たちのいる開拓団^{かいたくだん}は引き揚げ^あることになりました。そして夏休みのある日、村中みんなが安全な場所^{だっしゅつ}まで脱出することになりました。

農場の馬と馬車に生活用品と私たち子供や年寄りを乗せ、村人300人くらいが、行列を作って出発しました。引っ越してくるときとは反対の、山の中の道を歩きました。交通の便が良いところは、ソ連軍^{しんちゅう}が進駐^{しんちゅう}してくる可能性が大きいので、安全な山道を通ることにしたのです。

道のない山の中を歩くことになり、馬車を捨て、自分で荷物を持てるだけ背負って来る日も来る日も歩きました。1か月くらいたつとお米がなくなってしまう、木の実や草の根を食べました。赤ちゃんはお母さんのおっぱいが出なくなってしまう、いちばん先に衰弱^{すいじゃく}して死んでしまいました。それから、衰弱^{すいじゃく}して動けない病人が続出しました。

そんなときです、父も動けなくなっていました。今でもはっきり覚えています。私と父は衰弱^{すいじゃく}してみんなと一緒に^{いっしょ}歩けませんでした。母と兄は、先を急ぎねぐらの準備をすることになり、私と父は遅^{おく}れて歩いていました。夕方近くになり、あたりに霧^{きり}がたちこめ

ていました。「お父さんはもう歩けないから、ここで火を燃やしてあ
たろう。枯れ木を拾ってきなさい」。でも霧で湿っているので、火が
つきません。辺りには夕闇が漂い、冷え冷えとしていました。父の
衰弱しきった困惑顔、心細さ。すると、母はひき返してきて父を背
負ってよろけながら歩き出しました。誰もが衰弱していて、自分1
人で歩くのがやっとなのに、どうしてあのような力が出たのでしょ
う。父を思う愛の深さを感じます。

それから何日も、私は眠ってばかりいました。でも母と兄が、魚
を捕りに行ったのに1匹もいなかったことや、父と一緒に「海ゆか
ば」を歌ったことを覚えています。父が元気になったら後からゆく
ことにして、村人たちには先に出発してもらいました。秋も深まり
冬になるまでに山を抜け出さないと、みんな凍え死んでしまいます。
そんな中、父は亡くなりました。髪の毛と爪を遺骨の代わりにして、
毛布と木の枝を父にかぶせながら、母と兄は声をあげて泣いていま
した。私は放心状態で、悲しみを感じる力もなかったようです。

村人達の踏み分けていった後を頼りに先を急ぎました。「もう少し
お父さんの傍にいようよ」。「早く行かないと皆が歩いた後がわから
なくなってしまう。狼も居るし…」。母と兄の会話を耳にしながら、

ただふらふらと歩いていました。何日か経って人の声が聞こえました。それは、懐^{なつ}かしい村人達でした。

村人たちに合流したある日、今夜のねぐらを探しながら歩いていると、一軒^{いっけん}の家に灯りがみえました。「あそこへ行って泊^とめて貰^{もら}おう」。ところが、そこは恐^{おそ}ろしいところでした。数人の男がみんなを取り囲み、持ち物から着ているものまで全部取り上げてしまったのです。追いはぎです。寒い夜空で、裸^{はだか}で震えていました。

次の朝、霜^{しも}の降りた線路づたいを裸^{はだか}でかたまって歩いていると、着るものと食べ物を恵んでくれる人に出会いました。「どうせ引き揚^あげの時には持つてはいけないのですから、遠慮^{えんりょ}はいりません」。そう言ってくださったそうです。

その頃^{ころ}、一緒^{いっしょ}に机を並べて勉強した私の同級生で、たった1人生き残っていた男の子は、衰弱^{すいじゃく}して歩くことも出来ず、お母さんに負んぶされていました。垂れた足がブランブラン^ゆ揺れて、首が後ろにのけぞっていると思ったら、その子は死んでいました。衰弱^{すいじゃく}しきつて、泣き叫^{さけ}ぶことも出来ずに死んでいったのです。泣きながら負^おぶって歩いているお母さんを私の母は、なぐさめながら、埋葬^{まいそう}するところまで連れて行きました。

夜の冷え込みが強くなり、朝起きてみると隣に寝ている人は死んでいた、というような毎日が続きました。今思えば、母は避難所生活の厳しさには耐えられないと思ったのでしょう。現地の家庭で家政婦をするようになりました。夕方帰ってくるときは、何かしら食べ物をもたらってきます。その後、住み込みで働くようになり、私もついて行きました。栄養失調の私を抱えて、母は大変でした。

日本に帰れることになり、ハルピンまで行きました。長兄と姉がいた学校のあるところでは、毎年夏休みには必ず開拓の村へ帰ってきていた2人ですが、村を引き上げて以来、お互いに消息がわからないままでした。姉の寄宿舎には、係の先生が後始末のために残っており、「終戦の前にみんなで日本へ帰りましたよ」という言葉を聞いて母は安心したと言います。

長兄のいたところへも行きました。母は、何か所か訪ねていったのですが、行方はわかりませんでした。引き揚げ列車が出るので、「男の子だから、何とか1人で帰ってくるでしょう」と言って、探すのをあきらめました。

終戦翌年の昭和21年、黄色い花菖蒲の咲く頃、長い長い避難生活を終えてやっと日本に帰ってきました。母も次兄も私も着の身着

のまま、2年間ろくに風呂にも入らず、もちろん髪^{かみ}も洗わず、ぞうきんのようになった服にはシラミがたかっています。荷物もなく、やせこけた亡霊^{ぼうれい}のような姿で母の実家にたどりつきました。先に帰っていた姉や、祖母をはじめとする母の実家の人達が、暖かく迎^{むか}えてくれました。でも、母の苦労はまだ終わっていません。まだ帰って来ない長兄の消息が心配です。また父^な亡き後、どのようにして生活していったらいいのでしょうか。母の得意な和裁では物資不足の折、生活できません。母は学友を訪ねて行商をしました。

そんな折、やっと日本に帰って来たのに、次兄は衰弱^{すいじゃく}が回復せず、病気で死んでしまいました。しかし、悲しみに浸^{ひた}っている間もありません。母は身を粉にして働きました。そのせいか母は、胃けいれんの発作を時々起こして寝込^{ねこ}みがちになりました。

私たちから1年後、みんなが心配していた長兄が帰ってきました。私たちと同じように体一つ、着の身着のままでした。

戦争は絶対にあってはならない事ですが、東日本大震災のように、いつ地獄^{じごく}が出現するかわかりません。あのとき、私の置かれた境遇^{きょうぐう}には、地獄^{じごく}の中にも仏様のような人がたくさんいました。この恩は、母が口癖^{くちぐせ}だった「親の恩は順送り」で、身近な人達にお返ししてい

かなければならないと思っています。そして、可愛い孫たちの未来が、平和で暮らしよい世の中であることを願っています。

(この文章は、平和教育は感受性の強い小学生以前から行うのが良いとの観点から平易な表現にしました。)

「軍人からシベリア抑留^{よくりゅう}体験」

大出泰司

歳月の流れは早いもので、今から70年前のことです。それは昭和20年2月、私が21歳^{さい}の時でありました。実家から私の勤務先の会社に電話がありまして、宇都宮の36部隊から召集令状^{しょうしゅうれいじょう}が来たということでした。入隊まであと3日だけしか余裕がなかったのです、大変でした。

後始末が大変で会社との手続き等済ませ、私物の整理、送付して全部完了^{かんりょう}し帰郷の身になり、さあ電車に乗って栃木^{とちぎ}駅に到着したのが、入隊日の前日午後6時でした。もうその時は栃木^{とちぎ}は2センチ程の積雪でどんどん降り続いていました。実家方面に行く定期バスはすでに終わりになっていましたので、隣^{となり}のタクシー営業所へ行きまして、明日入隊の件をお話ししましたが、雪のためですか、簡単に断られました。この当時は電話機、車等ある家庭はなかったのです。もう実家まで歩く以外はないと決心し、荷物を肩^{かた}に実家まで6キロメートルの距離^{きょり}を歩きました。実家まで2時間余りかかり到着し、ホッとしました。

実家には親戚^{しんせき}、近所、組合の方々が私を長時間待ったことと思
います。私と対面してからはすぐに帰ってしまいました。それから家
族だけの最後の一夜を語り過ごして就寝^{しゅうしん}しました。

翌日^{きしゅう}起床したら驚^{おどろ}きました。雪が40センチほどの最近見られな
い大雪でした。栃木^{とちぎ}行きのバスは運休になりました。昨夜同様歩く
のが苦でした。しばらくして駅^{どうちやく}に到着しましたら周辺から入隊する
方が10人くらい集まっておりました。鉄道も雪のため両毛線^{りょうもうせん}と東
武線が全線不通で何時開通になるか見込み^{みこ}みないとの掲示^{けいじ}が出されて
あるので困っておりましたら、栃木^{とちぎ}市役所で貨物自動車を手配しま
したので入隊する方は乗車してくださいとのことで助かりました。
時間までには無事入隊できました。

入隊後は宇都宮^{わず}に僅か7日いて中国に移動され、当地で軍人とし
ての基礎^{きそ}教育を受けて終了^{しゅうりょうご}後は8月まで駐在^{ちゅうざい}し、部隊^{きたちようせん}は北朝鮮に
移動し、間もなく20年8月終戦を迎えました。

武装解除^{かいじょおよ}及び武器放棄して無装備になり、あとは内地^{きかん}帰還の船を
待つばかりになったのです。10月に入ってしばらくして港に船が
入港したので皆で喜んで乗船し、しばらく船の中で越^こし港に入港し
ましたが、ここは日本ではなく、ロシアのウラジオストクだと喜び

も一変し、下船になりました。

シベリアはすでに10月でも真冬で北風強く寒さが厳しく、我々が泊まる^と宿舎がないのです。その晩は野宿で夕食も出ず、最悪でした。翌日は早々にシベリア鉄道で貨車に乗せられ、一昼夜食事と水も^{あた}与えないで、停止したところは広大な原野で四方八方、樹木、家屋など何一つない草原にただ一棟^{いっとう}あるのが収容所でした。外回りは^{ゆうし}有刺鉄線が二重に張られ、^{とうぼう}逃亡できないようになっていました。収容所の内部は板張りで、電気、ガス、水道、^{ふうろ}風呂、勝手の設備がなく部屋の中心部にペーチカ（ストーブ）があるだけで炊事^{すいじ}は別棟^{べつむね}にあります。水は近くの川水を利用するのです。電気はないので油ランプを利用しました。

シベリアの四季は次のようになります。冬は6か月（10月から3月）、春は2か月（4月から5月）、夏は3か月（6月から8月）、秋は1か月（9月）であります。冬期中は毎日^{うすぐも}薄曇りの天気です。太陽の光線がほとんど見られません。ロシアに連行されて間もなく身体検査が^{じっし}実施されました。これは体内の精密検査ではなく、体の外面を見るだけなのです。^{はだか}裸になってロシアの軍医の前に行き肉付きがよいかの検査で、良好な者は1級、次が2級となり、この人は重労働の作

業をする訳です。3級の者は細身の人が指名されます。労働は軽労働で燃料用の薪作りと軽い農作業が主なる仕事でした。4級になった人はやせて骨ばっている人で、作業が無理とされ作業はありません。冬の作業で朝出発前に気温が氷点下30度以下になったときは作業は中止になります。

寒い国で生活は食べ物が大事と思いますが、抑留されている人たちの食事は苦勞しました。朝と夕食は主食として毎日小豆100パーセント、ジャガイモを細かく切った混ぜ物、ジャガイモだけ入ったスープで副食（おかず）、漬物が全くないのです。昼は黒パン2枚であります。肉、魚、卵、酒等は一度も腹に入れられなかったです。食事の量は、仕事量によって計算され、仕事量が多いほどたくさん食事にありつける事になるのです。このカロリーのない食事よくりゅうで抑留中にあの労働たに耐えて、よく体がもったことに感謝しております。

抑留中不思議なことがありました。頭髪とうはつが全く伸びないため散髪さんぱつは一回もありませんでした。すねの毛ぬが抜けてきれいになくなりました。爪つめも伸びず爪切りつめきもなかったのです。栄養不足が原因で体がここまで落ち込んだのです。

病気けがや怪我の際いりょうの医療関係のことであるが、我々の体を守る薬が

ないのです。例えば、頭痛^{およ}及び咳^{せき}が出るので作業前^{しんさつ}に診察に行くのですが、体温計が出され体温が38度以上の熱があるとその日は作業が休めるのですが、38度より少しでも低いと作業に行くようになるのです。休みになっても薬は無し、食事も一般の人と同じ、ただその日は休めるだけなのです。

終戦後ロシアへ連行された人は、北朝鮮^{きたちょうせん}と旧満州^{まんしゅう}に駐在^{ちゅうざい}していた軍人がほとんどで、捕虜^{ほりよ}同様の扱^{あつか}いをされ、嚴寒^{げんかん}と飢え^うの生活で苦勞^{ひさん}しました。この悲惨な実態を風化させないように、後世に残したいです。

「戦争体験記」

押田澄子

戦争が末期に近づいた頃から本土空襲が始まりました。夜間は光がもれないように深々と黒い布をかぶせたので、子供達は暗い電燈の下で勉強をしていました。

空襲警報も頻繁に発令されるようになり、夜中でも家族全員頭巾をかぶり、庭先の小さな防空壕へ9人寄りそって息をひそめていました。幸い直下の爆弾は落とされませんでした。家財道具等をリヤカーに積んで農家の知人宅へ運ぶ途中、錦着山の近くだと思いましたが街の方ですごい轟音がしたので驚いてあぜ道のみぞに身を伏せました。後に聞いたのですが、万町と平柳町の境に1発落とされたそうです。

食料品や衣類は配給制になり、食べ盛りの子が多い我が家ではとうてい配給だけの米や麦では足りず、母が着物や帯等を持って近隣の農家へ行き、野菜やいも等と交換してもらいました。

学校へ持っていく弁当には米が少なく麦がおおく、いも入りでした。少数ですが、弁当を持ってこれない子もいたようです。大根

の葉は干して保存し、おかゆやおじやに切りこんで食べました。その外、さつまいものつるや、食べられる野草を探してとってきました。草入りのうどんが配給になったこともあります。

終戦が近づいた頃^{ころ}には、米の代用として砂糖やごろごろした大きなさつまいも（家畜用^{かちく}と思われる味の無いもの。）も配給されました。衣類も不足し、足袋^{たび}や靴下^{くつした}の穴をつくろい、学校へ持って行く雑巾^{ぞうきん}は、小さな布をはぎ合わせてやっと形にする始末でした。

このような辛い^{つら}日を経験した私たちにとって、あの戦争の目的はなんだったんだろうか。多くの若者^{若者}を犠牲^{ぎせい}にし、国内では飢え^うや被爆^{ひばく}に苦しんだ。このような悲惨^{ひさん}な戦争は絶対に避け^さなくては行けないと痛感しております。

「危険文書隠匿罪」

菊地明子

長い苛酷な戦争の歲月。昭和20年8月の敗戦まで、国民は戦争を推し進めるために都合の良い教育を受け、その思想を押し付けられた。それに反する考えは全て「危険思想」、いわゆる「アカ」として〈しょっ引かれ〉〈ぶち込まれ〉、拷問の上に処刑されたり虐殺されたりしたのである。現在の北朝鮮を彷彿とさせる。その犠牲者にはかつての大杉栄、伊藤野枝、小林多喜二をはじめとする多数の社会主義者や自由主義者、思想家や芸術家、その他のインテリ層が含まれていた。

しかし終戦を迎え、新憲法により国民は「思想の自由」を得た。私が生まれたのは昭和10年、満州事変（日中戦争）の最中であり、終戦を迎えたのは丁度10歳の時であった。

私にとっての戦争体験の強烈な思い出は、〈アメリカの戦闘機に機銃掃射を受けたこと〉や〈身内を戦地に送り出したこと〉に加え、〈思想犯〉という疑いで特別高等警察（特高）から尾行されたり、憲兵隊から監視されたりした父や周辺の人々（画家や小説家、詩人、

評論家たち)を不安な思いで見つめ、父の留守中に押し入った特高たちの無謀な行動を、慌てふためきながら呆然と見ていた母の姿である。

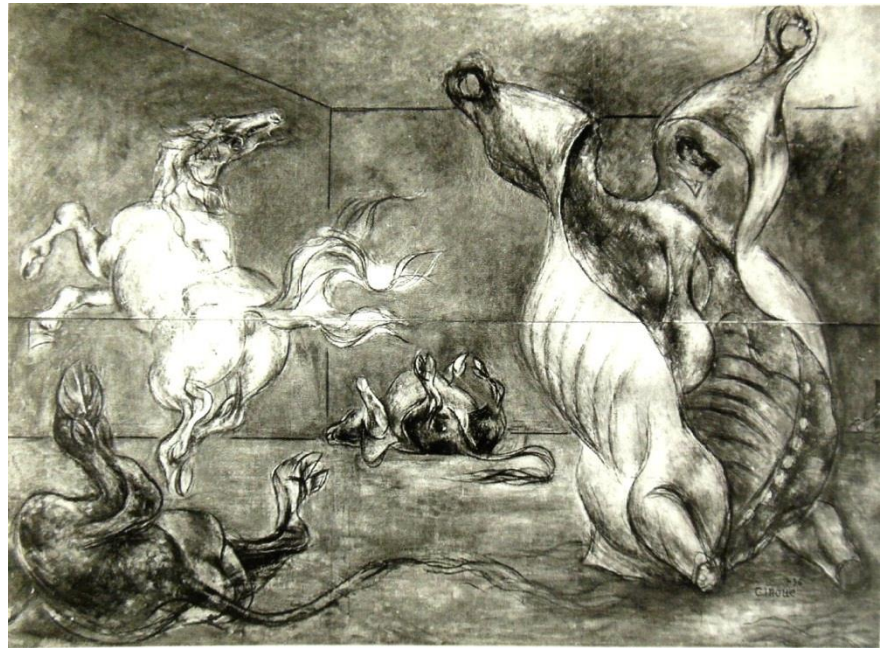
父は美術評論に携わっていた。芸術家は日進月歩、新しいものに挑戦するのが性である。しかし当時の支配者たち(軍部・政府・警察)はそれを許さなかった。新しい試みでも国策に準じた制作や作品でなければ画家は〈国策に反する危険分子〉とみなされ、「治安維持法違反」とか「国家総動員法違反」などの名目で「オイ、コラ」で〈しょっ引かれ〉、留置所に〈ぶち込まれた〉のである。「治安維持法違反」の被害者は大変な数であった。獄死が1,617人、拷問で殺された人は65人と言われている。それほど恐ろしい法律であり弾圧であった。

また展覧会に出品した作品は、〈臨検〉と云って予告なしに展覧会場に踏み込んだ特高たちによって、没収されたり、題名の変更を余儀なくされたのである。昭和11年、第6回独立美術展に出品された井上長三郎氏の有名な作品「屠殺場にて」は〈国情に批判的である〉という理由で展覧会場から撤回された。しかしこれは後日、題名の変更(原題は不明)ということで撤回を免れたが、昭和18

年の決戦美術展に出品された「死の漂流」は、〈厭戦的である〉と
いう理由で完全に撤回された。

我が家が特高に踏み込まれたのは昭和15年頃のことである。その
時、父は不在であった。特高たちは、まず父の仕事場の押し入れ
の天井裏の板を棒で突いた。隠しているものが無いかどうかを調べ
たわけである。薄い板だから何か置かれていればすぐ分かるのだ。
しかし幸運にも手忘れはなかった。当時、マルクス、エンゲルスの
理論書や経済論は「危険文書」と言われ、所持しているだけで〈し
ょっ引かれ〉〈ぶち込まれた〉のである。父の場合も、この〈臨検〉
は「危険文書」を天井裏に隠し持っていないかどうかが試されたわ
けで、もし隠し持っていたならば、それこそ「危険文書隠匿罪」で
〈しょっ引かれ〉〈ぶち込まれた〉ことであつたらう。しかし父はそ
ういう経緯を知っていたから、おいそれとは見つからない場所に隠
し持っていたらしい。特高たちは諦めて帰ろうとしたが、ふと本棚
のマルサスの「人口論」に目をつけ、抜き出して持ち帰った。恐ら
くマルクスと間違えてのことだらう。だから父は「危険文書隠匿罪」
で〈しょっ引かれる〉ことは幸いなかったのである。当時5才の私
にはそれらがどういう意味なのか知る由も無かったが、しかしその

時のただならぬ不^ふ穏^{おん}な空気は、幼い私にも恐^{きょう}怖^ふとして未だに強^{きょう}烈^{れつ}に残^まっている。〈戦争の時代〉とはこのように理不^り尽^ふな社会であった。こうした現実に二度と逆^{ぎゃく}戻^{もど}りすることが無いようにと、私は今強く願^{ねが}うのである。



井上長三郎「屠殺場にて」(1936年)
美術文化展出品

「二度と戦争を起こさぬために」

熊倉三朗

74年前の昭和16年12月8日。冬の気配が日ごとに濃くなり、冷気に首をすくめるような朝でした。

ラジオ放送が、「本8日未明、^{ていこく}帝国陸海軍は太平洋において戦闘状態に入れり」と、大本営（軍隊の最高司令部）の発表を伝え始めたので、聞いていた人たちは思わず食事の手を止めてしまいました。

日本の軍隊は、四年前から中国大陸に入り込み、中国の人たちと戦争をしていましたが、勝つことが出来ませんでした。そこへ、この放送です…「これで日本は、世界中の国を相手に戦争することになったのか」と、顔を見合わせたのでした。

^{しげん}資源の無い日本の国は、広い中国大陸に目を付けて、豊富な^{しげん}資源を自分の物にしようと戦争を仕掛けたのです。戦争に勝てば、^{しげん}資源がタダで手に入ります。

そのころの中国は、政府と共産党が対立して争っていたのですが、日本の^{しんりやく}侵略を許すわけには行かない、と話し合って争いを止め、皆が^{じゅう}銃を持って日本軍と戦い始めました。

広い大陸で、大勢の中国の人たちを相手にしての戦争は長引き、いつ終わるのか見当もつかない状態だったのです。

それを見かねたアメリカは、「日本は、侵略戦争^{しんりゃく}を止めて中国から軍隊を引き揚げ^あなさい」と求めましたが、資源^{しげん}の欲しい日本は戦争を止めずに、戦い続けます。

そこでアメリカは経済制裁^{けいざいせいさい}として、日本へ売っていた原油の輸出を停止しました。

そのころ日本は、消費する石油の大部分をアメリカからの輸入に頼っていましたが、政府は困ってしまいましたが、軍備に力を入れて「外国には負けないぞ」と、強気だった軍人たちは、「それならアメリカとも戦争だ！ 原油は、東南アジアの島を占領^{せんりょう}して手にいれよう」と、アメリカやイギリス、オランダなどの連合国を相手にして、戦争を始めてしまったのです。

まだテレビが普及^{ふきゅう}していない時代ですから、戦争の勝敗を知りたい日本の国民には、ラジオと新聞でしか情報が伝わりませんでした。が、「我が軍は、ハワイ島真珠湾^{しんじゅわん}のアメリカ軍艦隊^{かんたい}を攻撃^{こうげき}して大損害を与えた」、「我が軍は、フィリピン島^{せんりょう}を占領した」と、勝ち

戦の様子が伝えられますから、みんな「バンザイ！バンザイ！」と喜び合いました。

軍司令部の発表は、「敵を攻撃して大損害を与え、我が方の損害は軽微なり」と決まり文句で、日本軍の損失は伝えませんでしたから、勝っていると信じた国民は、軍隊のために生活物資を節約し、「戦争に勝つまでは我慢だ」と、粗末な衣類や食事で暮らしながら戦争を続けました。兵器を作る金属の原料も輸入出来ないので、家庭の金物まで掻き集めて兵器を作ったのです。

しかし戦場は、日本本土から遠く離れた太平洋の島々です。

そこまで武器弾薬や兵員、食料を、輸送船で運ばなければならぬのですが、連合軍は日本軍の補給を遮断する作戦をたて、途中で潜水艦や飛行機で待ち構えて攻撃します。

軍艦が足りなくなって護衛船の無い輸送船は、積み荷もろとも海の底に沈んで行きました。補給が途絶えた日本軍は、弾薬や食料が無くなって島々で全滅です。連合軍はその島々に飛行基地を作り、大型の爆撃機で日本本土の爆撃を始めました。

大編隊が連日のように日本本土に飛んで来て、大都市や軍需工場などを爆撃するので、空襲を知らせるサイレンの音が昼も夜も鳴

り響^{ひび}き、燃えながら落ちてくる焼夷弾^{しょういだん}が使われるようになって、住宅街も火の海になりました。「連合軍に大損害を与えている」と聞かされていた国民は、あっけにとられてしまいました。

戦場では、日本軍兵士が次々に戦死して行きます。兵隊の数が足りなくなるとは戦えませんから、軍隊では「若者も戦場へ！」と大学や専門学校で学んでいる学生たちに、軍隊への入隊を呼びかけました。

私の兄「高敬^{たかよし}」は、戦争の始まった年に20歳^{さい}の若者でしたが、長男に生まれた兄は、「将来は教師になって、苦労しながら育ててくれた両親に楽をさせたい」と、大学受験のため猛勉強^{もう}をして大学に合格。上京して働きながら学んでいました。

しかし戦争が激しくなり、しかも敵の飛行機が本土^{こうげき}を攻撃してくるようになっては、将来^{しょうらい}を夢見て勉強どころではありません。

学生たちは、「日本が戦争に負けたら家族はどうなる…。こうなったら自分たちが戦うしかない！」と、進んで入隊を志願し、軍隊^{きび}の厳しい訓練を受けました。

連合軍の大艦隊も本土に迫って、航空母艦から飛び立った戦闘機が、逃げ回る人たちを機関銃で狙い撃ちするようになりました。日本国内も、ついに戦場になってしまったのです。

日本軍飛行隊は、必死になって敵の艦隊に襲い掛かって攻撃しますが、爆弾は命中せず、あべこべに撃ち落とされてしまいます。

「何とかして敵艦を沈めて、国を守りたい」と、ついに一人の飛行士は爆弾を抱いた飛行機で敵艦に体当たりして行き、見事に敵艦に命中して敵艦を沈めることができましたが、自分も生きては帰れませんでした。

この報告を聞いた日本軍の司令官は大喜びして、「この戦法で戦おう」と「特別攻撃隊」と名付けて、各地の飛行隊から特攻隊員を募集しました。



兄・高敬

兄・高敬は、茨城県の飛行隊で中尉になって猛訓練中でしたが、特攻隊編成で指揮官として部下とともに出撃することになりました。体当たりの特別攻撃に出撃すれば、生きて帰ることは出来ません。

出撃前しゅつげきに短時間きゅうかの休暇かが取れた兄は、駅に駆け付け、汽車で栃木県の家族もとの許もとに帰って来ました。

しかし、特攻出撃とっこうしゅつげきのことはついに話さず、弟の私には「三朗、しっかり勉強しろよ」と、肩かたに手を置いて微笑ほほえみながら海軍式の敬礼けいれいをし、数時間滞在たいざいしただけで飛行隊もとに戻って行きました。心の中では、「俺が、敵を食い止めるからな」と言っていたのでしょ。

それから半月後。「特別攻撃こうげきで出撃しゅつげきし、沖繩おきなわ近くで戦死」の知らせがあり、間もなく遺骨が入った小さな木箱が、白い布に包まれて家族の許に届けられました。

箱があまりにも軽いので開けて見ると、遺骨ではなく髪の毛の入った封筒ふうとうがあるだけだったのです。…それ以来、我が家から笑い声は、途絶とだえました。

この戦争で、兄や大勢の若者たちが太平洋の海底に沈みました。

沖繩おきなわの近くでは、避難ひなんしようとした学童たちも、船もろとも沈んでいます。

日本の軍隊は「命おを惜しんで敵に降伏こうふくするな。死ぬまで戦え」と兵隊を教育しましたから、死ぬと判っていながら戦い続ける日本軍のため、連合軍にも死傷者が増え続けます。

人命を大切にすゝるアメリカは、早くこの戦争を終わらせようと科学者たちが研究を続け、ついに「原子爆弾」が作りだされました。

強力な爆弾は、ヒロシマそしてナガサキに投下され、一瞬にして十数万人もの人が焼けただれて戦う力を失いました。

この原子爆弾の威力で、日本は連合国に無条件で降伏し、戦争は終わりました。

この四年間の戦争で、日本の国は310万人もの犠牲者を出し、引き換えに平和な生活が訪れました。…しかし、再び戦争が起こったら…

今、世界の国々は戦争に備えて、数万発の「核兵器」を持っています。銃の撃ち合いで戦争が始まれば、自分たちの生命を守るため、相手に向けて核弾頭を付けたミサイルの、発射ボタンを押すつもりです。

放射能で汚染された土地に、人間は住めません。

ヒロシマ、ナガサキ、そしてフクシマが、教えています。

大切な「国」を失って… あなたは、どこへ行きますか？

「平和を守る」のは… 銃ではないのです。

「お母^かん！ボク、頑張^{がんば}るよ！」

小松義邦

私が生まれたのは昭和8年（1933）6月で、歴史年表をたどりますとこの年の3月に死者3,008人を出した「三陸大津波^{さんりくおおつなみ}」がありました。社会全般^{ぜんぱん}には「昭和恐慌^{きょうこう}」といわれる不況^{ふきょう}の波^おが押し寄せたのち、徐々に回復^{じょじょ}の兆^{きざ}しが見え始めた時期でもありました。

日本政府は不況脱出^{ふきょうだっしゅつ}を図るための活路を中国大陸に求め、国内の貧困農民^{ひんこん}に大陸移住^{すず}を勧めるなどの対外政策^おを押し進めました。そのため、当時の清国政府瓦解^{しんこく がかい}の跡目争い^{あとめあらそ}をしていた国民軍と中国共産党軍が手を結んで抗日戦線を展開するようになりました。その結果、日本とは比べものにならないほど大きな中国大陸の中で戦線が拡大し、次々と軍隊を増やさなければならないという誤った国力増強の道^{みち}を突き進むようになっていきました。

そのような時代の中で、私の父と母は青春^{むか}を迎え、父が24歳^{さい}、母が18歳^{さい}の時に私が生まれました。当時の年令は「数え年」でしたから現在の呼び方では23歳^{さい}と17歳^{さい}の新婚家庭^{しんこん}でした。

私の故郷は大阪府の西の兵庫県で、父は県央の播磨新宮町^{はりましんぐう}（現た

つの市)、母は県南の岩屋町(現淡路市)の生まれでした。昭和4年に始まった恐慌の只中で生きる糧を求めて大阪の街で出会い、結ばれて街の片すみに所帯を持った若い夫婦の幸せは長く続けさせてはもらえませんでした。

結婚して間もなく生まれた私が4歳になった時、28歳の父のもとに「召集令状」が届き、陸軍歩兵上等兵として大陸に送り出されることになりました。昭和13年、支那事変の最中の出来事でした。母が22歳で、新しい命を宿したときでもありました。

どのような言葉が交わされ、どのような涙が流されたのかは知る由もありませんが、わずか4年の新家庭を襲った非情な徴兵制度の「赤紙」を前にして、若い夫婦は出発までの短い名残りの時を震えながら過ごしたに違いありません。とは言え、外に向かつては「お国のために」勇んで出征兵士を送る駅頭に笑顔で立ったのではないかと思います。

翌年生まれた子供の顔を見ることもなく、父は2年後に大陸の土となりました。残された母や私と妹は父の実家に身を寄せましたが、家長制度と男尊女卑のしがらみの中では長く暮らすことができませんでした。

母は淡路島^{あわじしま}の実家に私たち兄妹を連れて帰りました。貧しい漁師町の生活でしたが暖^{あた}かい祖父母の慈^{いつく}しみを受けて私は小学生になりました。翌年の16年には太平洋戦争に突入し、国民生活はだんだんと困窮^{こんきゅう}するようになりました。女手で2人の子供を養っていけるような時代ではなくなりました。

母が2人の子供を連れて再婚する決意を固めたのは28歳の年のことでした。お国のために名誉^{めいよ}の戦死^とを遂げた「軍国の妻」が再婚するなど許されないという考えの小松家から猛^{もう}反対があったようですが、女性の職場が容易に見つからない時代に、子供2人を抱えた耐乏^{たいぼう}生活にも限りがあったと思います。

再婚相手にも2人の子供がいて、長男は外に出ており、長女はまだ小学生でした。義父と母と妹2人に私を合わせた家族5人の生活は子供心にも楽しく、間もなく生まれた妹も加えてますますにぎやかに楽しくなった私の幸せはその時が頂上でした。

民法の基本に置かれた「家」中心の慣習に照らし、新宮の祖父から私に対し小松家の跡取り^{あとと}としての呼び戻しがありました。母はもちろんのこと義父も必死に頼んでくれましたが、亡父も一人っ子であった小松家にとって私は必要とされたので、弁護士を通した話に

母も畳たたみを叩たたいて泣いていました。妹は女の子だからということで母の手元に残してもらえたことが、母や妹にとって何よりのことであつたと思います。

私が10歳さいの小学校4年生の夏休みに母や妹たち、それに優しくあつた母方のじいちゃんや腰こしの曲がったばあちゃんたちと別れる日がやってきました。淡路島あわじしまから対岸の明石までは4キロメートルで、現在では3,911メートルの「明石海峡大橋」が架かかっていますが、当時は1時間に1本の小型定期船が頼りの時代でした。

前夜来の赤い目をした母にしっかりと手を握られ、「義邦よしくに、一緒にいてやれずにかんにんやで、向こうへ行ったら可愛がってもらうんやで。身体に気を付けてな…」と何度も何度も言われ、祖父母や妹たちと、暖あたたかくたくましい義父の手の温もりを受けて船に乗り移り、やがて別れの実感が胸に込み上げてきた時ボーッと出航の汽笛が鳴りました。

「お母かん！ボク、頑張がんばるよ！」とただそれだけしか言えずに手を振ってから、70年の歳月さいげつが過ぎました。

戦争という大波の中で、どれほど多くの人たちの血や涙が流されたか知りませんが、小さな家庭の小さな子供のお話でした。

「戦争は「ノー」それは今でしょう」

柴田昭三

戦争について、語らなくてはならないと思うようになったのは、ごく最近なんです。

戦中旧制中学時代、2年生頃から、農作業、軍事訓練、工場動員に明け暮れ、3年生17歳の時、半ば強制志願兵の予科練へ、奈良県天理市の海軍奈良航空分遣隊入隊、その後、石川県小松航空隊転属…。

当時はアメリカに制空権を握られ、敵の目をそらすため、私たちの仕事の大半は、退避壕の土方作業だった。さらに奥の能登半島の寒村へ、早苗の綺麗な田圃に、厚板を敷き詰め滑走路、裏山に退避壕を造り、付近の農家に合宿する毎日。

1945年7月、突然私達の何人かに特攻隊への選抜命令が下りてきた。小松基地にいた頃、時々、沖繩戦目指して飛び立つ、積んだ爆弾と体当たりする特攻隊員を見送った。滑走路の両側に並び、「帽振れ！」の声、ひきつった隊員の敬礼した顔が、今でも忘れることはない。その順番が、遂に自分にも廻ってきたのだ。聞けば日本空襲の基地サイパンに、つないだグライダーの綱を切って、爆弾

ごと突っ込む作戦だという。軍国主義で洗脳された私でも、その馬鹿
さ加減に呆れたが、あと数か月で、海の藻屑となる現実を逃れるす
べを知らない。こんな形で自分の一生は終わるのか。正直内心、め
げた。

一方こんな隊内の休憩時、隅っこで、ひそひそ話の数人のグルー
プ、東京出身、2、3歳上の同年兵「ある大学教授の話、日米の経
済力、軍事力の差は桁違い。日本は敗ける」。聞き耳を立てて聴いて
いた私には寝耳に水の話。

そんな頃、あの8月15日、突然兵舎の拡声器から「耐えがたき
を耐え、偲び難きを偲んで…」あの天皇のポツダム宣言（降伏受諾）
の放送だ。軍部独裁、一億総玉砕、日本不敗神話は音をたて、砕か
れたのだ。運命は大きく変わった。敗戦による落胆と「ああこれで
生きられたんだ…」一瞬両者が頭の中で交錯したが、生きるという
事の重大さは、私の胸を突き上げてきた。11月特攻隊と宿命づけ
られた私にとって、人間として生きる喜びは、何物にも代え難い。
今でもあの時の衝撃の思いは二度と経験のない出来事だった。

そんな思い乗せて無蓋貨物列車でそれぞれの故郷へ帰った。そこ
で待っていたものは、敗戦後の現実の厳しきだった。食糧難、大

都市の焼け跡^{あと}、インフレ、足りないづくしの配給、買出し、担^{かつ}ぎや、闇市^{やみいち}、一方では財閥^{ざいばつ}解体、農地解放、資産制限、それはドン底生活に明け暮れた。みんな必死に生きた。生活のため働いた。その一方で生き残^{おのれ}った己の生き方を徹^{てっていてき}底的に考え、この状況を作り出した。社会的、人間的原因を極めたいと、あらゆる分野の関心ある事を、書籍^{しょせき}が手に入りにくい状況下で夜半まで読みあきった。学校でこんな意欲で勉強した事が経験のない程、渴^{かわ}きに潤^{うるお}いの水^{ごと}の如く、興味が知識欲、情報、そして人生^{い か}如何に生^いくべきか、哲学にありと確信した。

当時若者の間に哲^{てつがく}学への関心が高まった。そのうち、あの私らの考えを^こ超える、人類の希望と未来をめざす日本国憲法が制定された。戦争^{ほうき}を放棄^{すうこう}する。この崇高な理念は、過去の間違った戦争への^{しんし}真摯な反省の上で、これからの平和な日本国民の目標と希望を表すものと同時に、その後の世界中で、紛^{ふんそう}争や争い事が今でも絶えない中、70年間、戦争で1人の人も殺し、殺されなかった日本人が世界からも目標とされる国となったのだ。

しかし勤勉で、頑^{がんば}張り屋の日本人が戦後^{こくふく}を克服し、世界市場に進出するに伴い、バブルを生み出し、これが永遠に続くと錯^{さっかく}覚しだし

た。財界や政治家は^{おご}驕り出し、憲法はアメリカから押し付けられたもの、とケチをつけ出した。私もその^{ころけっこん}頃結婚、子どもを育てる身になり、毎年少しずつ収入も増えていた。家族たちには、戦争の話は暗くて、聞きたくない、と言われ、私たちも過去の^{ひさん}悲惨な思いを^{ほり}掘起こすこともないかと引いた。この甘やかしが、今にして思えば^{まちが}間違っていた。

やがてバブル^{ほうかい}崩壊、株価大暴落、大不況^{ふきよう}はじわりじわり生活を^{あっぱく}圧迫しはじめた。その後日本の経済はじりじり悪くなり、都市と農村、格差の広がり、就職難、中小^{れいさい}零細業者^{とうさん}倒産、最近では大企業もグローバル化の中で決して安全でなくなっている。金さえあれば何でも出来るという人間の^{おご}奢りが、自然破壊によるツケが出てきている。原発問題、東北地震、天候異変、^{おきなわ}沖縄問題、年金、社会保障、人々は日常生活に追われ、ものを考える余裕がない。つい自己中になる。

「いざとなれば^{だま}黙っていない」皆さんおっしゃるでしょう。今戦争を語る人が減っています。私なども（86歳）先がない。皆さんの^{ひさん}悲惨な話は戦中^{どこ}何処にしようと、どういう立場であれ、^{だれ}誰もが^{ぎせい}犠牲になったのです。秘密保護法、集团的自衛権閣議決定、事態は^ふ踏み

だされてしまっているのです。今の皆さんの生活は、平和と言う土
台で成立します。戦争というのは、必ず己は正義をかざします。し
かし戦争は集団人殺しの人類の最大の犯罪です。こちらが憎めば、
相手も憎みます。憎しみは繰り返し、終わりなく続くでしょう。

いつ声を挙げるのか。それは今でしょ——。



昭和20年6月撮影(本人)

当時描いたイラスト

「特攻」ののぼり旗を掲げた特攻隊員と、戦艦で攻撃を受けている
ルーズヴェルト米大統領が描かれている。

「飢えに苦しみ、空襲におびえた日々」

白澤イト

戦争体験談という事で計らずも受けてしまいましたが、この^{とし}齡にしてうまく書ける^{はず}筈も^ご御座^ざいません。ただ、正直な心で本当の事を書き残せたらと思っております。

私は結婚して下目黒に住んでおりました。家族3人です。しばらくして時々^{くうしゅう}空襲警報が鳴るようになりました。その日も^{くうしゅう}空襲警報のサイレンが鳴り、^{ばくげきき}爆撃機^{せんとうき}護衛の戦闘機が低空で頭上すれすれに急降下してきました。片羽の一部しか見えなかったので機種はわかりません。^{もちろん}勿論敵機でした。余りの急なことで、子どもをおんぶして常に逃げる準備をしていたのですが、オムツとミルクだけを持ち、家の^{ぼうくうごう}防空壕に入りました。でも、1人では心細く、近くの大きな^{ぼうくう}防空壕に走って行きました。3、40人位の方たちが入っておられましたが、「助けてください！」とお願いして入れてもらいました。^{だれ}誰一人声を出す人もなく静まり返っております。間もなく上空を飛行機が通ったかと思ったとたんにズンズン、ズンズン、と体をゆさぶられる^{ばくはつおん}爆発音、また、ズンズン、ズンズン、永遠に続くかと思われま

した。実際は4、50分続いたかと思いますが、長い死の恐怖^{きょうふ}にさらされました。

やがて静かになり、外に出てみると大崎、五反田^{ごたんだ}方面が火の海のように赤く見えました。立っていた場所からは4、5キロの場所、多くの方が亡くなったかと思うと、自分と子どもは生きてここに立っているのにと、悲しい思いでいっぱいでした。やがて周りの人たちの顔にも安堵^{あんど}の色が見え始め、それぞれの家に帰っていかれました。私は、主人の働いている会社の近くではないかととても不安になりましたが、しばらくして主人も帰り、話によりますと軍事工場がやられているということでした。

東京の空爆も日増しに激しさを増し、主人の会社も一部岐阜^{ぎふ}の中津川^{なかつがわ}に疎開^{そかい}し私達^{いっしょ}も一緒に行くことになりました。中津川は周りを高い山に囲まれその中に町がありました。空襲^{くうしゅう}の心配がない代わり食糧^{しょくりょう}がないのです。2週間に1升位^{しょう}の米の配給では生きていかれません。捨ててあったきつまの苗^{なえ}を取った後の種いもまで食糧^{しょくりょう}になりました。畦道^{あぜみち}に生えている野草はもちろん、兎^{うさぎ}の食べる草はほとんど食糧^{しょくりょう}になったのです。配給のお酒をお米と交換^{こうかん}するのもやっと出来る状態でした。やがて子どもが栄養失調になってしまい、

いた
致し方なく栃木の実家に命からがら帰ってきました。帰った直後は
栃木はまだ平穩^{へいおん}でしたが、しばらくして敵の計画的な空襲^{くうしゅう}が始まり
ました。毎日毎日数十機の大編隊が上空を飛ぶのです。その大編隊
を護衛する小型機がもし地上の人間を見つけたら一目散に急降下し
て私達を攻撃^{こうげき}してくるのです。とっさに水のない堀^{ほり}等に飛込み、子
どもを守りしばしの難を逃れました。もう、うっかり外にも出られ
ません。空襲^{くうしゅう}の目標は太田の飛行場だったようです。

その頃の日本には若い男性はおりません。

私と同級の男性は90%が海外に出たまま帰って来られませんで
した。小さい頃共に遊んだ仲間でした。

女性ばかりで日本の国を守っていかなければなりません。真剣^{しんけん}で
した。第一食べるものがないのです。お米の上米は全部供出してし
まい、残りのくず米だけを食べ細々と生きていきました。その頃、
外地の兵隊さんから手紙が届きました。食糧^{しょくりょう}がなく木の皮をはい
で食べているとの文面にみんなみんな涙^{なみだ}を流しました。これでは戦
争に勝てるどころか、自分の生命も守りきれなかったと思います。
実際、ある島では戦死者よりも餓死者^{がし}の方が多かったと、戦後にな
って聞きました。なぜ、日本が先に真珠湾攻撃^{しんじゅわんこうげき}をしてしまったのか、

小さな日本が大国との戦争に巻き込まれてしまったのか、私にはわかりません。政治・外交の失敗だったのか、不幸な結果を反省しなければならぬと思います。

こちらは余談になりますが、その後30年程して旅行社の案内でバリ島に行ったことがありました。その時現地の方々から耳にした話を忘れることが出来ません。遠く日本を離れた兵隊さんたちが故国に帰ることも出来ずに思い余ってのことでしょうが、千丈もある深い海に「お母さーん」という悲しい声を残して次々に飛び込んで行ったそうです。実話だけに聞き捨てならない思いで涙しました。現実に日本兵の乗っていた戦車もあちこちに残っていました。現在の私達の幸せもこうした過去の悲しい犠牲の上にあるのだと感謝しきれぬ思いと共に、民間人、軍人を問わず、亡くなられた方々のご冥福をお祈りしたいと思います。現在日本の平和の素晴らしさ、住み良さは世界一だと思っています。多くの犠牲を払って得た平和がいつまでも続きますよう心からお祈りして筆を置かせていただきます。

「戦争体験」に思う

白沢英子

現在、私は84歳。横浜で生まれ育った。

その頃は、世界恐慌が日本列島に波及、世界経済混乱の真只中であつた。1939年には、ヨーロッパ全土を巻き込んだ第二次世界大戦の混沌の中で、日本は国の侵略、南方資源の確保を狙い、日独伊三国同盟のもと、忘れもしない1941年12月8日に米英に宣戦布告、太平洋戦争の勃発となつたのだ。

その時、私は小学校5年生。日本海軍は、ハワイ真珠湾を突如攻撃、太平洋戦争の場は東南アジアの島々を駆けめぐつたのである。

日本軍は開戦と共に快進撃で、南の島々を占領、太平洋全域に勢力を広げた。

まだ小学生だつた私は、地図を広げては驚くほどの大国を相手に戦いを挑む自国を思い、心の隅では一抹の懸念はあつたように思つた。

しかし、若い日本の特攻兵士たちが、人間魚雷となつて敵に体当たりする様子は、無念の思いではあつたが、一方ではその勇敢さに憧憬の思いさえ抱いたものである。しかも、新聞、ラジオでの戦果

の報道の度に小躍り^{こおど}するほど戦いに夢中であつた。

国内では、連日出兵兵士の見送り、男子に代わる女性たちの苛酷^{かこく}な労働は大変なものであつた。学生は学徒動員され、勉強どころではなかつた。国民の暮らしは「勝つまでは我慢^{がまん}しましょう」をスローガンに、じっと耐^たえるばかりであつた。

「衣」は、モンペと言って着物を改良し、裾^{すそ}にゴムを入れたももひきの^きようにして穿^はいて体を動きやすくしたり、頭を防ぐための防空頭巾^{ずきん}を腰^{こし}に下げたりして、身を守るようにした。

「食」についてももっぱら芋類^{いも}・大豆・少々の米も配給制でお腹をすかし、じっと我慢^{がまん}した。

「住」については、そちこちに防空壕^{ぼうくうごう}が掘^ほられたり、夜になると敵機^{しゅうらい}の襲来^{とうかかんせい}を防ぐための灯火管制^{とうかかんせい}といって電灯を黒い布^{おほ}で覆い、一点の灯も外^もに洩れ^もないようにした。

1945年アメリカの猛反撃^{もうはんげき}に悪化を続けた日本は、折角^{せんりょう}占領した島々も撤退^{てつたい}・陥落^{かんらく}・玉砕^{ぎよくさい}し、ついに本土東京の大爆撃^{ばくげき}を受け多くの犠牲者^{ぎせい}を出した。

いつも横浜上空を通りこしていた敵機は、ついに私たちの住む横浜^{よこはま}をめがけてきたのである。

その時私は、学徒動員されお弁当箱ひとつを持って出勤していた。
朝からの空襲警報はなかったのに、その日は始業後いくらもたたな
いうちにサイレンがうなりを上げたのだ。「学生さんはお帰りなさい。
早く、早く」

ところが私たちは勤務中の空襲警報も慣れっこになり早帰りが
つまらないと、その日に限って家に帰らず、山手にかけて登り学校の
先生に逢いに行ってしまったのだ。

先生が大喜びで迎えてくれたその時、海の方から港にむかってB
29の編隊が横一線の黒帯となって迫ってきたのである。先生が叫
んだ。「だめだ。早く校庭の防空壕へ！」

さっき見えたB29が不気味な速攻で頭上を埋めつくし、低空飛
行で空が暗くなった。また先生の声「小さくかがむんだ！丸くなる
んだ！」

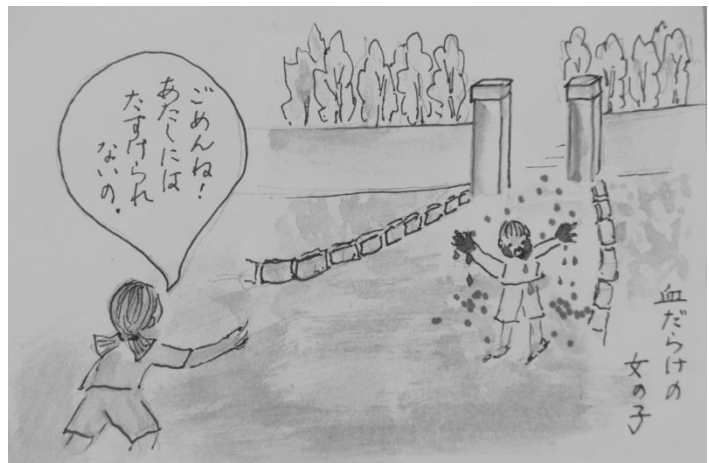
爆音の凄さで耳を塞いだ私は壕の中で、きょうは死ぬ！と思った。
近くに落ちたであろう爆弾の炸裂音で先生にかじりついた。

静寂が戻り、こわごわとび出した壕の上に不発の焼夷弾がころが
っていた。「B29は去った。早く帰りなさい。家の人に会えなかつ
たら、必ずここへいらっしやい」

それきり先生とお会いすることはなかった。眼下に見えた横浜の街は、すでに火に包まれ、炎の渦となって燃えひろがっていた。

先生や、裏門から帰る友だちとも別れ、山手通りに立っている表門までのだらだら坂に向かって私は走り出した。その時、救いを求めてきた血まみれの女の子が門の中へ入ってきた。頬の肉が垂れ、血に染まった両手を広げ、よたよたと私に近づいてくるのではないか。

驚きと怖さと悲しきで
私は介抱どころかまわれ右
をして、裏門から逃げてし
まったのだ。「ごめんね！」
と叫んだのを覚えている。



帰り道、既に筵を被った死
体が累々と横たわり、私を追
いかけているような感であっ
た。筵から消炭のような黒焦
げの足が覗いていた。

家は焼け落ち何もなかった。大きな布団を背負い逃げ惑っていた母に逢え嬉しかった。一時避難の焼け残った学校の床に蹲りホッ

としたのも束の間、^{くらやみ}暗闇の^{ろうか}廊下の向こうから目と鼻と口だけ出した全身包帯だらけの人が歩いてきた^{おそ}恐ろしさも忘れられない。



その後、日本各地の^{ばくげき}爆撃、^{おきなわせん}沖縄戦、^{ながさき}広島・^{げんぱく}長崎の原爆投下により、ついに日本はポツダム宣言の^{じゅだく}受諾、^{こうふく}無条件降伏をしたのである。

この太平洋戦争の終結から70年を経た。今、私は生きているが戦争という^{おろ}愚かな^{こうい}行為によって、たくさんの^{みたま}御霊となった人びとの思いに心を^は馳せなくてはと思った。一度しかない人生を大切にするためにも^{さけ}反戦を叫びたい。

「戦争を友にした小学生の頃」

杉浦初江

私は昭和の^{ひとけた}一桁生まれで、6人兄弟の長女として生まれました。戦時中は小学生でした。その頃^{ころ}の学校は国民学校と言ったのです。

生活は大変に貧しいものでした。今の暮らしからは考えられないものでした。特に^{しょくりょうなん}食糧難はどこの家でも子どもが多く大変でした。

また、食べ物だけではなく、着る物、^{はきもの}履物等すべて、物がなかったのです。配給制でしたが、^{しょくりょう}食糧等は全く足りませんでした。農家等から高いお金^{はら}を払って買ってきたのです。また母親の着物等を取りかえてきたこともありました。^{しょくりょう}食糧不足の事は、私も忘れません。卵は分け合って食べ、納豆も^{つぶ}粒分けして食べたこともありました。食べ物で兄弟げんかもしました。砂糖もなく、代用品のズルチンやサッカリンで^{かんみ}甘味料理に使っていました。また、主食の代わりに、かぼちゃ、さつまいも、とうもろこし等で食べたこともあったのです。白いご飯が食べたいと弟妹たちは言うのです。

学校に行くのは^{はだし}裸足でした。学校に足洗い場があり、そこで洗って教室に入るのです。

その頃勉強は2～3時間しか出来ず、あとは奉仕活動でした。田んぼにタニシ取りに行ったり、イナゴを取って学校の大釜で茹でてそれを売ったのです。校庭の角に、あぜ道に大豆を育てたり、勉強が出来ませんでした。

家に帰れば子守をしたり、家の手伝いをしたり、良く働きました。勉強する時は夜だけです。それも電気の傘に風呂敷を掛け、周りを暗くして下だけを明るくして本を読みました。今はうらやましいですね。

戦争もだんだん激しさを増してきました。

昭和20年7月12日宇都宮が空襲されたのです。私達家族は防空頭巾を被り、庭の防空壕に入りました。その時、宇都宮の方面が赤く染まって見えたのです。弟妹たちは恐ろしくて母にしがみついていた。その時、母はよほど慌てていたのか下の弟を反対向きにおんぶしていたのです。今となっては笑い話ですが、その時は母も必死だったのでしょう。子ども6人を守るために…。

そして17日には、とうとう栃木市に空襲になり小型爆弾が投下されたのです。

今思い出しますと、あの時は牛と一緒に田んぼに出て奉仕作業を

していました。私たちは先生の誘導^{ゆうどう}で急いで近くの川に牛と共に隠^{かく}れました。震^{ふる}えている小学生、泣き出す女の子、先生は一生懸命^{けんめい}小さな私たちを元気づけて守ってくれました。今も忘れません。その時に泉町の常通寺や栃木市の中心地万町交番近くも被害^{ひがい}に遭^あったのです。

戦時中の小学生であった私たちは、それでも元気に生きております。現在の小学生、母親は、保育園や幼稚園^{ようちえん}等があり、食べ物、着る物、欲しいものは何でも手に入りますね。学校の先生に叱^{しか}られても殴^{なぐ}られても先生様様でした。今のようにイジメ等は毎日のようにありました。それでもグチも言わず頑張^{がんば}ってきた小学生でした。もっともっと勉強したかった。自分の子どもは自分で育てるものと思^{おも}って大切に育てました。自分の人生は自分で造るものと私は思います。

「わたしの^{だいとうあ}大東亜戦争」

鈴木明子

現在80^{さい}歳。三重県^つ津市に引越したのは国民学校5年（昭和19年）、10^{さい}歳の時だった。6年の夏休みに入って間もない7月24日正午少し前に本格的な^{くうしゅう}空襲が始まった。

暑い日だった。雨もしばらく降らず土ぼこりが^ま舞いあがっていた。
^{けいかい}警戒警報が鳴ってすぐに^{くうしゅう}空襲警報が鳴ったので、今日は変だねとい
いながら家族で^{ぼうくうごう}防空壕にとびこんだ。「ぐわん」という音がして真っ
暗になる。生き^う埋めになったかと思いそのままじっとしているとま
わりが明るくなる。土ぼこりで真っ暗になったのだ。すぐに2回目
の^{ばくだん}爆弾が落とされる。3回4回と上空を^{せんかい}旋回しながら投下している。
飛行機（B29）の^{ばくおん}爆音と^{ちやくだん}着弾の音とその後^こにやってくる真っ暗な
時間、本当に^{きょうふ}恐怖の時間だった。永久に続くかと思った^{ばくげき}爆撃も気が
つく^こと終わっていた。

不気味な静けさの中でぱちぱちと物のはぜる音がし、^こ焦げくさい
^{にお}臭いがただよってくる。^に逃げなくちゃと立ち上がると^{ぼうくうごう}防空壕の屋根
はなくなっていて遠くのほうまでずっと見通せる。郵便局も津^つ新町

の駅も県庁の建物も見える。その間にあった家が全部吹き飛ばされたり倒壊したりしたのだった。我が家も屋根はなくなり柱も折れて畳さえなくなっていた。ここには焼け死んでしまうと山のほうに歩き始めた。

道は板や瓦やコンクリートの破片で足の踏み場もない。妹が何かに足をとられてすべってしまった。よくみるとそれは死体から飛び出ている腸の一部である。気がつくあたりにはねじれた死体や人間の形をとどめない死体や腕や足など身体の一部が転がっている。爆弾の直撃を受けたものや爆風で飛ばされたものだ。母が顔を血だらけにしている。怪我をしたはずはないと思って見廻すと、木の枝にひっかかって血が滴っている死体に顔があたったのだ。

気持ち悪いも怖いも悲しいもない。一切の感情がなくなって、ただその場所から少しでも遠ざかりたい思いでいっぱいだった。山の方へ少し行くと国防婦人会の人達がにぎりめしを渡してくれたが食欲は全くない。それより水が飲みたいと井戸へ連れていってもらい、水を飲むと生き返った思いだった。

その時低空飛行をしてきた戦闘機(P51)が機銃掃射を始めた。操縦士の顔がはっきり見えた。何がおこるかわかっていても体が冷

たくなって動くことができない。私の右側の2メートル位の所を

銃弾じゅうだんがプスプスと穴をあけていった。飛行機が去ってしまっても、動くことができない。しばらくたっても口をきくこともできない。

次の日、父方おじの叔父夫婦に会い、焼け残った叔父おじの家に行く。

4日後の7月28日、再び焼夷弾しょういだんの投下を受けた。29日の切符きっぷが手に入ったからと、母の実家に行く準備をしていた矢先だった。

夜中近く空襲警報くうしゅうのサイレンに外に出てみると、空一面に照明弾だんが広がって昼間のような明るさだった。「うわぁきれい」と見上げてみると、いきなりガワガワガワという音と共に油脂焼夷弾ゆししょういだんが投下された。

焼夷弾しょういだんでは、防空壕ぼうくうごうに入っているのは焼け死んでしまうと田んぼの中の道を走り出す。叔父おじたちとも離れてしまい、道もわからずただやみくもに走った。一発だけ仲間はずれになった焼夷弾しょういだんが一步踏みふだした私の左足にあたった。痛いのか痛くないのかもわからなかったが突然とつぜん歩けなくなってしまった。

母は私を田んぼの中へ突き落とす。家族と田んぼの隅すみに蹲うずくまっていると、焼夷弾しょういだんのせいで田んぼの水がだんだん温まってくる。そして熱くなる。目の前へびを蛇や蛙かえるがからだをくねらせながら白い腹をみ

せて流れていく。熱さに我慢できなくなって隣の田んぼに移るとすこし熱さを逃れることができた。海岸の重油タンクに火が入って爆発し、あたりは更に明るくなった。

夜があけて叔父の家に行こうとするが、一面の焼野原でどの方向に歩いたらいいか見当もつかない。ぼんやりと座っていると叔父がやって来た。「丸焼けになってしまった。何も持ちだせなかったけど無事でよかった」といい叔父の家に行くことにする。「あれ、母さん私歩けないよ」夜の間は足をやられたのは夢だと思っていたがそれは本当のことだった。膝から下がまったく力が入らない。立とうとしても立てない、痛くはないのに涙がでてしまう。叔父が半分焼けたシーツを持ってきて、この上に乗れという。這ってそこに横になるとずるずると焼け跡を家まで引っ張って行かれた。

そこへ消防団の人が5・6人担架を持って、怪我人はいないかといいいながらやってくる。ここにひとりいますというと、筵を敷いた担架に乗せられ県庁の裏にある日赤の防空壕につれていくといわれすぐに運ばれてしまった。

行った先は土の上に戸板を並べただけの場所で、山に横穴を掘ったのだからじめじめとしている。その中で十燭光位の電灯がいくつ

かぶらさがっているのが何とも陰気な感じを受ける。垂れ流しだから臭いもひどい。戸板の上にはにぎりめしがおいてあるが誰も食べていない。戸板のまま外へつれだされる人もいる。あつまた死んだね、患者たちがひそひそと話している。傷を負った人は誰ひとりとして治療らしい治療を受けていない。傷には蠅がたかり、太った蛆虫が傷にもぐりこもうとしている。誰も大声をださない。泣く人もいない。時々弱い呻き声が聞こえる。私はいつの間にか眠ってしまった。

「これから病院を変わるから起きなさい」と父の声が聞こえた。

「何日ここで寝てたの」と聞くと「今日は7月30日だから二晩かな」といわれる。ここで二晩も過ごしてしまったのかと思うが余り実感がない。新しい戸板と筵と布団がリヤカーの上へのせられていた。

薄暗い所からいきなり太陽の照りつける外に連れだされて目もあけられない。眩しいだろうと黒いこうもり傘をさしかけてもらう。田んぼの中の曲がりくねった細い道をリヤカーが進む。途中戦闘機が急降下してくる。リヤカーをひいた男達はそばの木陰に逃げこむが、私はリヤカーに乗ったまま身動きできない。飛行機が行ってし

まうと「嬢^{じょう}ちゃんごめんな」といってもどってくる。そんな事を3回ほど繰^くり返し、津^つから10キロほど南^かの香良洲^{らす}の病院についたのは午後3時過ぎだった。母と妹達はもう到着^{とうちやく}していた。たった2日しかたっていないのに長い間^{はな}離れていた気がして涙^{なみだ}がでてきた。

ここでも十分な治療^{ちりょう}は受けられなかった。手術はできないといわれ、そのまま左足をギブスで固められた。3帖^{じょう}ほどの部屋で家族4人の生活が始まった。七輪^{なべ}、鍋^{ちやわん}、茶碗^{はし}、皿^{はし}、箸^{はし}、ちゃぶ台等を周囲の人からもらって、久しぶりに豊かさを味わい、生活も落ち着いた。雑音まじりでよく聞こえず、意味もわからない「8月15日の玉音放送」を聞いたのもそこだった。

8月中に病院は閉鎖^{へいさ}され強制退院となり家にもどったがしばらくは歩くこともできなかった。松葉杖^{つえ}をついて歩く練習をし、10月になって学校に通うことができるようになった。

それから30年、40代は足が痛むとなだめながら痛みとつき合ってきたが、今はなだめてもなかなかいうことをきいてくれなくなってしまった。

今になって手術をすすめられている。

(平成18年3月記)

「宇都宮空襲」

関口喜美子

米軍の空襲は、徐々に地方都市へと狙いをつけてきた。この目的とは、地方の軍事工場と相俟って一般の民家を大量に焼失することで、日本国民の戦意を失墜させることだった。宇都宮もいよいよ昭和20年7月12日、B29の襲来で爆破された。空襲のあった夜は、姉と二人きりだった。父は勤務先、母と弟は田舎の知人宅に疎開していた。

あの7月12日の夜、ラジオは珍しく甘い声で歌う灰田勝彦の「新雪」という曲を流していた。当時のラジオ放送は、警戒、空襲警報発令情報と時局ニュース、軍歌が主体となっていたので、初めて耳にしたその爽やかな曲に感動した。その心地よさを胸にして眠りに就いた2時間後、「ウーウーウー」という警戒警報のサイレンとほぼ同時に、縁側のガラス戸がオレンジ色に光った。

当時は時局がら、昼も夜も作業着姿で通していたため、すぐに跳び起き、枕元に備えておいた頭巾と雑のうを肩にかけ外に出た。

道路は、各家々から飛び出してきた人でいっぱいだった。私と姉

はぞろぞろと無言で歩く人達に混じって歩いた。

その避難^{ひなん}していく最中、「ヒュウッ、ヒュウッ」とまるで大きな口笛のような不気味^{ぶきみ}な音が頭上をかすめる。この音の正体は戦後わかったのだが、実は焼夷弾^{しょういだん}が落下する時、それについているリボンの火が風を切る音だったという。あの何とも言えない不気味^{ぶきみ}な音は、今もなお耳に残っている。

とにかく、私達が逃げ^にていく途中^{とちゆう}に焼夷弾^{しょういだん}が落ちてこなかったことは、なによりの幸運だった。逃げ^にて逃げ^にて辿^{たど}り着いたのは、現在の聖山公園墓地である。当時、あの場所は小高い草木^{しげ}の茂^{おか}った丘であった。市民の避難^{ひなん}場所の一つとして決められていたらしい。

避難^{ひなん}してきた多勢の中には赤ちゃんもいたようで、「泣かすな、敵^{ねら}に狙^{ねら}われるぞ」と怒鳴^{どな}ってる人がいたが、何とも重苦しい雰囲気につつまれていた。

小高い台地から見る東の空は、しばらく赤く染まっていたが、やがて夜明けが近づくにつれて空の赤味もうすれ、人々は帰り始めた。私と姉も、またその群に入り、家へと向かった。

家に着くと、父が待っていてくれた。父の話によると、私達を案内^{もど}じて家に戻^{もど}った時、同時に焼夷弾^{しょういだん}が二発落下。一発は玄関前^{げんかん}の庭^つに突

きさきり不発。もう一発は、屋根を突き破り縁側を抜けたが、これまた幸いなことに縁の下えんの土にもぐり込んでくれたので、縁側の板が少々焼けただけで大事には至らなかった。

ところが、一軒隣のご主人は、同じ時、焼夷弾の直撃を受けて即死、家も全焼という悲劇に遭ってしまった。私達と一緒に避難した奥さん、小さな娘さんの嘆きは、計り知れないものだったろう。

7月12日の空襲で全焼した小学校は、私の母校である西小学校、東小学校、築瀬小学校の3校である。

空襲は、国鉄駅周辺から始まり、下町地域はたちまち炎に包まれた。そのため、西小学校の焼死児童1名に対し、東小学校では、何と24名の児童がその犠牲となってしまったのだ。

ちなみに、学校別の死亡児童数を見ると、東校24名、築瀬校21名、中央校7名、西原校3名、戸祭校と今泉校が2名、西校と昭和校が1名、合計61名という痛ましい数である。

そして死亡児童を多く出してしまった東小学校の校庭は、空襲翌日から遺体安置所となったので、多勢の人達は変わり果てた遺体にとりすがって泣き叫び、凄惨、地獄のような光景だったという。

私達の学校（旧県立宇都宮第一高等女学校）現宇都宮女子高等学

校の犠^ぎ牲^{せい}者は4名、しかしその中の2人は、私と同じ学年の友人だ。
前日まで、同じ校舎の学校工場の中で作業していたのに。今でも亡^なき彼女^{かのじよ}の面影^{おもかげ}が脳裏を過ぎる。

ここで宇都宮^{くうしゅう}空襲^{くうしゅう}について、もう少し説明を加えたい。

7月12日(木)11時19分、111機のB29爆撃機^{ばくげき}が襲来^{しゅうらい}、
806トンの焼夷弾^{しょういだん}を市内めがけて落とした。そして市街地の6割
近くを焼き^つ尽くした。さらに、死者620名以上、家屋焼失者47,
960名を出したのである。

当時、宇都宮市の人口は9万余人であったので、半数以上の人が
罹災^{りさい}したことになる。

しかし、宇都宮^{くうしゅう}の空襲^{くうしゅう}はこれだけではない。その後も爆弾投下^{ばくだん}に
遭^あい、死者が出ていたのである。その他、機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}という恐るべき
攻撃があったのだ。それはP51というアメリカの戦闘機^{せんとうき}が超低空^{ちよう}
で飛行し、地上の人々をまるでなぎ払^{はら}うように、一人一人を目がけ
て機関銃^{きかんじゅう}を打ちまくるのだ。「バリ、バリ、バリ、カタ、カタ、カ
タ」という銃声^{じゅうせい}は、未だに耳から離れない。防空壕^{ぼうくうごう}の中に身を隠^{かく}し、
敵機が早く去りますようにと、恐怖^{きょうふ}に震えながら祈^{いの}るのみだった。

しかし、この機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}はまたしても、市内男子中学生6名を犠^ぎ牲^{せい}に

したのである。この中の一人は、全焼した^{やなせ}築瀬小学校で焼け跡^{あと}の片付けをしていた中学生（現在の宇高生）、そしてあとの5人は、焼けた日清製粉会社で金属回収をしていた下野中学生（現在の作新学院高校生）であった。なくなった中学生は、命を落とす直前まで、教師や多数の友人と^{いっしょ}一緒に仕事をしていたのに…。

ましてこの日は7月28日、8月の終戦を目の前にしての何とも痛ましい^{ぎせいしゃ}犠牲者であった。

宇都宮大空^{くうしゅう}襲の翌日から、私達の学校にある記念館という建物が特別救護所となり、負傷者がたくさん運びこまれてきた。しかし、^{いりょうひん とぼ}医療品に乏しく、ここで命を落とした人もかなりいたと聞いている。

救護所の周りには、血に染まった包帯が無数に干してあったが、あれは物資不足だったため、何回も洗い直して使っていたのだろう。手当を受ける人、手当をする人、^{たが}お互いに^{つら}きぞ辛いことだったと思う。

^{くうしゅう}空襲から三日後に登校し、校長から、本校生徒の^{りさいじょうきょう}罹災状況等について話を聞いた。

前にも述べた通り、生徒で焼死された者は4名、負傷した者5名、家族が焼死した者18名、^{りさい}罹災した生徒は418名ということであ

った。

この報告の後、例によって「戦争には断固として立ち向かい、
愛国精神に則って立派に働くべし」との校長訓話を受けた。集会後
は、再び学校工場の仕事に入った。

しかし、もうこの頃ころから仕事がめっきり減って来た。主要都市は
壊滅かいめつ状態になり、もはや工場には飛行機や船を造る資材が無くなっ
ていたであろう。工場から来ていた指導員は飛行機おおの前方を被う
風防すという透き通った強固なガラスのようなもので、何か小さな細
工物すをしていた。今思うとあれはブローチだったのかなあと、かす
かな記憶きおくが残る。作業はそれほど暇ひまになっていたのだ。

しかし、そうしている間にも警報のサイレンは鳴り、その度に私
たちは防空壕ぼうくうごうにかけこむ。

暗い壕ごうの中で、東京から疎開そかいしてきた快活な友人が「もし、ここ
に爆弾ばくだんが落ちたって、死ぬ時はみんな一緒いっしょだから平気、平気」なん
て言って明るく振る舞ふっていた。

彼女の言葉かのじょに作り笑あいつちいの相槌あいつちをしながら、ひたすら警報解除を待
っていたのだ。

「語り続けたい原爆の悲惨さ」

高橋久子

昭和20年8月6日8時15分、1個の原子爆弾の閃光と轟音により、私の広島は一瞬にして、焼野原となり14万人の市民が殺されました。皮膚は焼き尽くされ内臓までも熱障害を受け、水を求める余り川に入って流され、防火水槽に入り死亡した多くの人々。地獄を見るような被爆者たちです。当日広島市には42万人の人が住んでいました。その日、広島県立第二高等女学校1年生の私は、学友100人と広島駅裏にある陸軍東練兵場で勤労報告隊員として、サツマイモ畑(軍用食糧)の草取り作業に動員されていました。8時15分後方より黄橙色の光線がシューーと轟音をたてて通り抜けた瞬間、どの位時間がたったのでしょうか。私は気を失い周りが生温かくなり、薄暗い灰色になっていました。皆の泣き叫ぶ声で私は目が覚めました。前にいらした先生は顔が大きく真っ赤に腫れ、目がその奥でキラキラ光っていました。「作業は終わり、立てる人は立ちなさい」と言われました。我が身をよく見ると、両手首は焼けただけ、手の皮がぶら下がり、モンペも赤茶色に焼けています。周りを

見れば、手探りで先生や学友を呼ぶ姿があります。先生は^{きじょう}気丈にも「現地解散」の指示を出されました。私の体は痛み、時が経つにつれ^{ひざ}膝には1リットルほどの水が^た溜まり、歩くとドボドボ音がしました。手の指にも^{すいほう}水疱ができ、次第に^は腫れあがり、丸いボールの様になりました。しばらくして黒い雨が降りました。

折から^{くうしゅう}空襲警報となり白い体操服は目立つので、山の^{しげ}茂みに入るように指示されましたが、やけただれた手足に^{ささ}笹の葉が当たって痛く、小川に^か架かる土橋の下にかが^こみ込みました。「水は飲まないで。眠ってはだめ」との先生の^{さけ}叫び声が聞こえましたが^{がまん}我慢できず水を飲みました。そのまま警報が解除になるまで^{かが}屈んでいました。ふと周りを見ると数人の学友も^{かが}屈み始めていました。

家に帰らねばと思い体を起こし、歩き出しました。傷ついて^{みちばた}道端に横たわっている人を横目に見ながら足を引きずり、ようやく夕方になって牛田の自宅にたどり着きました。家は焼かれていましたが^{ひたい}額に^{けが}怪我をした母に^{むか}迎えられ、^{うで}腕の中に^{かが}転がり込みました。母がモンペの^{こし}腰のゴムを^こ歯で切って^{なみだ}焼け焦げた布を、^{はら}涙を流しながら^{ひたい}払いのけてくれました。

その日は太田川浴いで野宿、川向うの市街地の中心部では、一晚

中パチパチと建物や樹木が燃え、夜空に赤い太陽が沈まないように薄明るく生温かい夜でした。

翌日、戸板に乘せられて戸坂(へさか)駅より芸備線三次駅に下車、母の実家に運ばれました。ぐったりしている私を見て誰もが死ぬと思ったそうです。実家は旅館業で当時、傷痍軍人の宿となっており、軍医が回ってこられた時、初めてぶら下がった皮膚や、水疱の手当てを受けました。真夏です。ハエがたかればウジが湧く、一日中蚊帳の中で、布団の上に油紙を敷き両手を枕で支え、皿で膿汁を受けていました。

治療の合間、「こんな体にして可哀想に、ごめんね、許してね」と母が涙しました。「これは戦争のせいでお母さんのせいではない、非情残酷な原爆だよ」幾度か母の温かい手を握りました。夢多い青春時代ピンク色に引きつったケロイドにどれほど涙した事か、わかりません。「生まれたばかりのヒヨコの様に弱々しく今にも崩れそうだ」と後日、三次高校の学友の話です。その後も脱毛や貧血、紫斑点などに悩み体に入り込んだ放射線は白血病を始め様々な後遺障害を引き起こし、被爆者に不安と苦しみを与えてきました。適切な医療対策が始まったのは、被爆後12年たった1957年からですが、社

会的誤解に基づく差別を受ける中で病と生活に苦しみました。今でも暑い夏を^{ながそで}長袖、^{しちぶそで}七分袖で過ごします。ある集会で、出身地が広島だと申しますと「原子^{ばくだん}爆弾が落ちた時は大変だったでしょう、もう60年余経つと忘れているでしょうね」と言われました。毎朝^き着替^がえの度に、^{きずあと}傷跡を眺め、^{なが}一生これと付き合わなくてはと思っているのに、知らない人には仕方ありません。この宿命に負けずなお笑顔で前向きに生きています。10年前までは、体験を話していませんでしたが、今は積極的に^{ひばく}被爆体験を話しています。戦後日本は70年にわたって平和を^{きょうじゆ}享受してきました。^{げんぱく}原爆や戦争に目を背けることなくあくまで話し合いで接し、しっかり真実を見つめてください。証言書が読み^つ継がれ、語り^つ継がれて核兵器^{かく}廃絶^{はいぜつ}と、世界の^{こうきゆう}恒久平和の大切さを次の世に伝えていかれることを念じます。目を閉じると8月6日の光景と紙屋町で亡くなった父の面影^{せんめい}が鮮明^うに浮かびます。

「戦争体験語り継いで」

田村立吉

昭和16年12月8日の朝、大宮村立大宮南国民学校（昭和16年より尋常小学校が変更）5年生の時です。学校のラジオは校庭に向けて放送しています。ときの首相東条英機（陸軍大臣）の放送
大本営発表「本日未明米英両国と戦闘状態に入れり」宣戦布告の放送
続いて軍艦マーチの音楽が勇ましく鳴り響く、日本海軍は350機をもってハワイ真珠湾軍港を奇襲攻撃して戦果は飛行機特殊
潜航艇により有名なアリゾナ戦艦その他アメリカ太平洋艦隊を全滅
させる、次々と入るニュースに「ヤッター」「ヤッチャイ」と言って
集まってきて手叩きです。（その日の後のことは思い出せない。）

私は昭和18年（学校6年生より）栃木市立（戦後県立となり男女共学となる。）栃木商業学校入学（男子中等学校5年制）、次年度からは工業学校となり、商工学校生でありました。日本軍はわずか5か月でアジア各地を占領した。2年生の頃ミッドウェー海戦より戦況不利のため学徒動員を命じられて、出征兵士の農家の手足のため、私は当時、家中村に行った。

その後、学徒動員として両毛線おまたで小俣（足利市）駅で降り工場に行く。（同じ汽車で栃女生も「女子挺身隊員勤労ていしんたいいんきんろう」にて“かすりのもんぼうくうずきんぺ防空頭巾を背にした姿”で、手前の山前やままえ駅（足利市）で降りる。）
織物工場おりものでしたが軍需工場ぐんじゆになり、中島小泉飛行機製作関係にあり、
ここでは零式戦闘機ぜろしきせんとうきの後部「ツバサより下部」を組み立てた。

ある日製造の鋸びよう打ちを教えられ2人で向かい合っしてする作業で失敗（おしゃかという。）指導の工員の人ひとは笑って怒らない。どうせ沖繩まで飛べばいい。敵艦てきかんに体当たりするんだ。[1機1艦かん]先輩の若い多数学徒が軍人として神風特別攻撃隊かみかぜとくべつこうげきたいで生命とを賭して任務すいこうを遂行して殉じゆんじたのだ。（申し訳ない）

時には学校に行くと軍事教練（大正時代より男子中等学校以上には軍事教練が義務付けられていた。）陸軍現役配属将校の指揮で校長はサーベル（簡易な刀）さきを捧げ壇上だんじように立って学生の隊列行進をするのを観る。先頭には進軍ラッパを吹いて行進する。威厳いげんのあること。
あるとき私たちの隊列（足並）が合わず笑ってしまった。後で横ビクタ（向かい合っしてやる。）先輩せんぱいに殴り役がいる海軍の精神棒と言って6尺棒で尻を殴りつける。私もやられた痛みと悔しさは忘れられずこの記事に載せました。「匍匐前進ほふく」（地面に腹ばいになって進む。）

等もする。

にちろ 日露戦争で使ったものという、数本あるとても重い銃^{じゅう}の手入れを
ぶんかいそうじゆ 分解掃除油^ふで拭く。その銃^{じゅう}を持って当番交替^{こうたい}で朝校門(北口)に立っ
て先生が来ますと「捧げ銃^{ささ}」と大きな声で言っていたします。力の
ない私はよろけてしまった。

夜行訓練あり。午後5時より背囊^{はいのう}(カバン)、足はゲートル巻き(栃
商生の正装、栃中生は日露戦争当時の白のキャハンでした。)太平山
のふもと(東側)を回り晃石山^{てるいしさん}に登り太平山の六角堂の道に来て下
りる。午後8～9時ともなるので終電車いっぱいです。後くれて我
が家に泊めた小山市の同級生あり。

北門のある校舎の北側は「タコツボ」と言って2～3人用の小さ
な防空壕^{ぼうくうごう}を掘った。19年都市部への空襲^{くうしゅう}が激化するや学童疎開^{そかい}と
いう同級生もいた。

校舎の床をぶち抜いて軍需工場^{ぐんじゆ}にする。小俣工場^{おまた}で覚えた飛行機
の組立^{びよう}(銃打ちも上手になった)をすることになり壊す作業^{こわ}を手伝
い工場にて3機位か、出来たと思う、出荷せず終戦になりました。

軍人勅語^{ちよくご}あり暗記した。一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。
五か条あった。言えないとビンタあり。不動の姿勢もよろける。当

時の軍事に関する軍事教科書、まんがの本（戦争に関係するもの）終戦まもなく町内会の命令にて供出したことで無いので、思い出せないのが残念です。

上級生は上官である。道であった時は手を上げて敬礼すること、忘れたらビンタあり。上級生もそのうち学徒動員で日光古河精銅所^{せいどう}へ行ってしまう。また4か年制度で卒業できることになった。（卒業生として兵役になれる。）先輩^{せんぱい}が志願して送別会はグラウンドの芝^{しば}の上でいつも歌うのが「ズンドコ節」

先輩^{せんぱい}が特攻^{とっこう}に行く知らせあり。飛行機で母校（栃商）上空^{せんかい}を旋回する。皆で手を挙げた。見たのかツバサを振って去りゆく。いつか来た講堂で見た白服で7つボタンであの予科練の先輩かなと思った。

芝塚山^{しばつかさん}には防空監視所^{かんし}が置かれていた。

私も少年飛行兵にあこがれた。志願した。（宇都宮市で行った。）不採用理由は長男は家を守ることにあり、銃後^{じゅうご}を守るようとのことでした。また学校での希望者には海軍による訓練、日光中禅寺湖^{ちゅうぜんじこ}でボートを漕ぐ訓練、ツバなし帽子^{ぼうし}の水兵さん「大日本帝国海軍^{たいこく}」と前面に書かれていた。楽しい1日でした。

町内の事になります。役場から赤紙^{へいえき}がくる。兵役^{げんえき}の通知書^{げんえき}現役の

兵士が不足するので、徴兵検査ちょうへいけんさの合格者より少しぐらいの体格が落ちても補充兵ほじゅうとしての通知が来る。

いざ出征しゅっせいが決まると日の丸に寄せ書きする。先頭しゅっせいに出征兵士の旗、奉公袋ほうこうぶくろを提げている。送る行列は白いエプロンに白たすきに「大日本国防婦人会」の文字。町内の人、皆日の丸の小旗を振り振り軍歌日本陸軍を歌う。”天に代わって不義ふぎを討つ 忠勇無双ちゅうゆうむそうの我が兵は 歡呼かんこの声に送られて 今ぞいで立つ父母の国 勝たずば生きて 還かえらじと 誓ちかう心の勇ましき。

我が家から町内の神社に向かう、武運長久ぶうんちようきゆうを祈いのって「行ってきます」「まいります」「行きます」。(特攻隊とっこうたい)と元氣にあいさつします。その後数人で栃木駅に行く。只今町内の墓地に多くの英靈えいれいの刻まれた石碑せきひがあります。謹つつしんで哀悼あいとうの誠まことを捧ささげます。

昭和20年3月工場で公用の電車切符きっぷ(無料)をもらったので浅草に行った。観音様かんのんさまの裏の方に池があった。数人の着物を着た女の人が浮かんでいた。2～3日前の空襲らしい。片付ける人がいないのか、悔しさと戦争の残酷ざんこくさを実感した。

原爆の恐ろしさに困った日本国だが、1億総玉碎ぎよくさいを唱せんとうえて戦闘せんとう継続けいぞくを指向しこうした。しかし、昭和20年8月15日、突然天皇の玉音ぎよくおん

放送があると知らされて教員室前の廊下^{ろうか}で聞く。何のことやら私にはわからないでいたが「終戦^{しゅうせん}詔勅^{しよくちよく}の放送」と知らされて戦争が終わったのだと周りで騒ぐ^{さわ}のでなんだか困ってしまった。

アメリカ機から投下する広告ビラは何日はどここの爆撃^{ばくげき}の日程らしい。(拾ってはいけない、見たり、しゃべってはいけないとされて憲兵＝兵隊の巡査が取り締まっている。) 権力強い。

最後になります。栃木市も16～18日頃に空襲^{くうしゅう}のうわさが流れていた。親類^{ひなん}の人が避難していたことあり。今日の蔵の町並みがあることに感謝し、先の大戦で犠牲^{ぎせい}となった方々に、深く合掌^{がっしょう}いたします。

「戦時中の思い出」

堀江宣男

私は昭和9年生まれで、旧岩舟村に住んでいました。昭和16年、尋常じんじょう小学校が国民学校と名を変えたその年に、今で言う小学校1年生になりました。国民学校は国民の基礎的訓練をして、お国のため、天皇陛下のために身をささげ教育を重視していました。だから、私は勉強をほとんどしなかったと思います。軍事訓練や勤労奉仕ほうしばかりで、勉強の時間があっても自習が多かったです。夏の炎天下えんてんかの集会などでは、不動の姿勢で聞けと言われ、汗を拭ぬぐうだけでも怒られました。冬は10センチメートルもの霜柱しもぼしらができていても裸足はだしで立たされ、泣いている子もいました。

小学校3年生からは武道が始まりました。お兄さんのお下がりの大きい木刀ぼくとうでやらなくてはいけなかったので、とてもつらかった思い出があります。

疎開そかいの児童もやってきました。慣れるまではみんなよく泣いていましたし、疎開そかいの子に対するいじめもありました。野菜などの食糧しょくりょうを持って行って支援しえんをすると、疎開そかい児童はお礼として勤労奉仕ほうしをし

ました。もともと東京の子どもですから百^{ひゃくしゅう}姓仕事などやったこと
ない子ばかりでしたが、終戦後も1年くらいいたりして、みんな上
手になっていきました。

小学校4年生くらいになると、爆撃^{ばくげき}に耐^たえる訓練をしました。近
くの山林に逃げ込んで、伏^ふせをして、目と耳^{みみ}を塞^{ふさ}ぐのです。先生は、
「もしアメリカ兵が上陸してきたら、爆弾^{ばくだん}を抱^{かか}りて戦車に走ってい
くんだぞ」と教えていました。みんな望んで、「兵隊さんになりたい」
と言っていました。

5年生になると空襲^{くうしゅう}警報がよく鳴るようになり、そうすると家に
帰されます。1年生の子が泣いていたのを慰^{なぐさ}めながら帰ったことも
ありました。

昭和20年2月10日に太田市にあった中島飛行機が大爆撃^{ばくげき}に遭^あ
いました。三毳山^{みかもやま}の上を大編隊が通って行ったのをよく覚えていま
す。あとから知った事ですが、アメリカの飛行機は1万メートル上
空を飛んでいたのに、日本の高射砲^{こうしゃほう}は8000メートルまでしか飛
ばなかったそうです。いくら迎撃^{げいげき}しようと届^{とど}かなかったとは、いか
に力の差があったか、日本はただ爆撃^{ばくげき}されるのを待つしかなかった
んですね。

昭和20年4月1日にB29爆撃機が三毳山上空に爆弾をさく裂させました。音が夜半から翌日の昼近くまで続き、我が家のガラス窓が壊れるのではないかと思うほど、その振動と激しい音が続きました。それは、時限爆弾と称し、長時間いつ爆弾がさく裂するかわからないため、地元の消防団も近くに寄れないほどでした。その爆弾のさく裂の跡（大きなスリ鉢型）は現在も残っています。

岩舟山の見晴台には、昭和19～20年防空監視所があり、「敵機来襲」にそなえて、常時2人1組で監視を続けていました。敵機の形式、その数、その方向など電話にて報告していた様子でした。どうして南方海上にて日本は迎撃できないのか？子ども心にも歯痒い感じがしました。戦後知ったことですが、その力を失ったの戦況だったそうです。

40歳以下の男性は国土防衛のため徴用されてしまって、ほとんどいなかったため、女性がなんでもやらなくてはなりませんでした。飛行機も女子挺身隊がつくっていました。ベニヤ板でも飛行機をつくったようです。汽車の車掌も女性がやりました。一億火の玉という軍歌も作られました。

同じく昭和19～20年になると、国土防衛のため、中国に駐屯

していた拓部隊たくぶたいが岩舟国民学校へ移駐いちゅうすることになり、私達生徒は
屋外教室おくがいなど経験した思いがあります。

学校生活は戦況と共に厳しくなり、軍隊方式の教育となりました。
例えば、クラスの一人が若干の「行いが悪い」ことが生じると、ク
ラス全員が、教師から「ビンタ・ゲンコツ」をされたことは日常的
であり、生徒の中で耳の鼓膜こまくが破れたとか、ケガをしたとかよく覚
えています。

学童たちに先生は「日本は絶対に戦争に敗けない」又、「過去に敗
けたことがない」、と日常的に言われた上に「子どもたちはウソをつ
いてはいけない」と教育した後の敗戦国日本。逆に先生はウソをつ
いたのでは…と心揺れる「戸惑いとまど」を覚えている。

したがって、世の中学校教育が大切であり、戦争は絶対に避ける
こと、“世界はひとつ”この平和な日本の尊とうとさを伝え続けなければ
なりません。



昭和20年4月1日、三轟山へ
米国空軍B29爆撃機ばくげききくうしゅう空襲。
写真は、その時の爆弾ばくだんの破片。
縦10cm、横15cm、厚さ1.5cm
重さ1.3kg



みかもやま ちゃくだん ばくだんあとち かんばん
三毳山に着弾した爆弾跡地と看板

「飛行機操縦訓練中の事故」

水谷郷

戦時中、飛行機操縦訓練中に事故は多発して多くの命が無駄に失われたが、公表されていないので一般にはあまり知られていない。私が経験した大きな事故の一つを紹介する。

私は少年飛行兵9期の整備の過程を昭和17年6月に終了して熊本県菊池飛行場に在った第103教育飛行聯隊（※1）に整備兵として配属になった。

その年、11月24日、この日、快晴、雲量零、風向西、気温18度。当日、操縦学生の訓練を終わり、時刻は11時過ぎ、教官、助教の慣熟訓練（※2）が始まった。

課目は「地上平面的射撃」ピスト（※3）横の芝生の上に縦横2メートル程の白布の標的を広げ、この標的に向かって上空400メートルくらいから突っ込み機関銃射撃を行う。但し訓練であるから操縦桿の射撃ボタンを押すと、翼上に装着されたカメラのシャッターが連動して標的の写真が写され、射撃の正確度が判明するようになっている。

操縦者が機体の突っ込み角度を規定の角度30度に保ち、照準眼鏡をにらんで正確に機軸が標的に向くように飛行機を操作しながら突っ込んで行き、照準があったところで発射ボタンを押し、操縦桿を引いて機体を引き上げる。

瞬間の引き上げ時機を失すれば、機体が地面に激突しかねない。高度の操縦技術が要求される訓練科目である。

教官、助教機の1グループが順次離陸して行く。離陸方向は西向き、3機が上空に在って一番機が第4旋回（※4）時点で機体を左にひねって突っ込んでくる。レバーを絞って降下してくるからエンジンは空転状態で軽やかにペラ（※5）の回転が上がり、引き上げると同時にレバーを押してエンジンにガソリンを送り馬力を上げ、排気音を轟かせながら急上昇して行く。

一番機が上昇して第1旋回にかかるところ、2番機が突っ込んでくる。その頃3番機は第3旋回点付近にあって、適宜の間隔が保たれている。練達（※6）のパイロットたちの見事な操縦が続き、次のグループが離陸して行く。何の支障も無く、訓練は順調に辿っているかに見えた。

間もなく演習終了となるので我々整備員も撤収にかかるべく、私

は、飛行場東端の列線にある自分の愛機の操縦席に座って、地上滑走のためのエンジン始動に取り掛かろうとしていた。

その時、異様な爆音^{ばくおん}に気付いてふと右上空を見上げると、2機が同時にピスト横に敷^しかれている標的^{ふぼん}の布板目掛けて突っ込んでゆく。

「あ、あ、あ、どうなるのだ、これは！」と思った瞬間、下の機がグイと機首を上げると同時に両機が激突した。地上100メートル前後の低空である。

「グァーン」という宛^{あたか}も戦艦^{せんかん}の大砲^{たいほう}が発射された時のような凄まじい音^{とどろ}が飛行場一帯に轟き渡った。

上の機はそのまま地上に落下して飛び散り、下から引き上げた機は、右翼^{うよく}をもがれて左翼^{さよく}の揚力^{ようりよく}だけとなって右回転しながら大きく放物線を描いて150メートル程先の地面^{げきとつ}に激突、飛び散った。

「これはえらいことになったぞお」

私は気が動転したまま操縦席から飛び下り、夢中でピストに向けて走っていた。

数秒後に現場^かに駆け付けた時、そこはガソリンの強い臭いが周辺に漂^{ただよ}い、飛び散ったどす黒いオイルの中にアルミのガラクタと化した機^{ざんがい}の残骸、その中央に飛行服姿の辻曹長^{つじそうちょう}と竹下中尉^{ちゅううい}（陸士54期）

が覆い重なるようになって突っ伏して、既に物体と化したかのよう
に身動きもなかった。

そしてそこには、今まで上空に響いていた爆音が瞬時に消滅し、
周辺を取り巻いた誰もが茫然、息を呑んで一言も言葉を発しない異
様な静けさと、降り注ぐ晩秋の明るい日差しがあった。

畠山中隊長が一言も発せずそこに立っておられたが、キラリと目
が光り、前方の地面に激突した機の方に向かわれる。私も後を付い
て走った。

その機も同じ様な状況であったが、操縦者は蒔田少尉（陸士55
期）で地上激突の際、操縦桿が咽頭部を貫いたようであった。

「蒔田！蒔田！」

と中隊長が大声で呼ばれ、顔を引き起こされたが「駄目だ」と首を
振られた。

数分経って、飛行場大隊の方から車が駆けつけてくるのが見えた。
事故の後始末は、飛行場大隊が担当するのである。

そして私たちも整備班長高野中尉の指示で黙々と飛行機の撤収
にかかった。

当時、私は18歳の兵長。終戦までに事故は数々経験したが、初

めての経験がこの大事故で生涯しょうがい忘れられない強烈きょうれつな印象として
胸奥きょうおうに刻み込まれている。

※1 教育飛行連隊 … 陸軍の航空部隊の一つ。新人飛行兵の訓練のための部隊で、昭和17年5月に編成された。

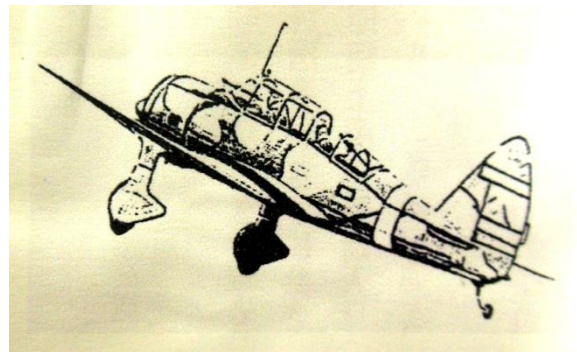
※2 慣熟訓練かんじゆく … ある程度の技術を習得した後に行われる高度な技術を必要とされる訓練のこと。

※3 ピスト … 普通のパイプテント。訓練開始の時、飛行場中間点付近に組み立てて、訓練指揮所として使う。

※4 第4旋回せんかい … 飛行機の操縦訓練において、離陸から着陸までの一連の流れのうち、着陸態勢前の最後の旋回せんかいのこと。飛行機は高度を下げ滑走路かつそうろの正面に対することとなる。

※5 ペラ … 飛行機のプロペラのこと。

※6 練達 … 熟練していること。



訓練使用の九八式直協偵察機

「宇都宮大空襲^{くうしゅう}を体験して今思うこと」

山口スミ

小雨のしとしとと降る、人々の寝静^{ねしず}まった昭和20年7月12日、宇都宮の中心部はB29の空襲^{くうしゅう}を受けた。この燃えさかる炎^{ほのお}の中私は逃^にげまわった。小学4年生の夏のことである。現在79歳^{さい}の私の70年前の出来事である。

しかしこの忘れられぬ空襲^{くうしゅう}の前後^{だれ}のことは今まで誰にも話したことはなかった。いや、話す気にもなれなかった。忘れようにも忘れられなかったのに。夫にも自分の子供にも教職^{ころ}にあった頃の教え子達にも語れなかった。

でも今年になり市役所の方から「宇都宮での空襲^{くうしゅう}を体験し栃木に移ったとのこと、その頃^{ころ}の事を児童たちに話してください」との要望を頂き、思い切って自分に問いかけてみた。あの忌まわしい体験を胸にしまい、終わってしまっても良いのか。次世代の、戦争を知らぬ児童達にこそ、話しておくべきではないのかと、決心した。

我が家は、私の遊び場^{ふたあらしんじんしゃ}だった二荒山神社からJR宇都宮駅^{うつみやま}の方向に歩いて5分くらいの家混みの中にあり、お寺も近くにいくつかあ

った。

あの日、朝から雨が降っていたので大人達は「今日空襲はないからゆっくり寝よう」と言い電燈に黒い布を被せ寝こんだ。

少し経って母親と祖母の大きな声で目を覚ました。真昼のような外の明るさ、2階から祖母がころがる様に降りて来た。母は下の弟を背負い、半纏を頭からかぶせ外へ走り出た。一面真っ赤な火の粉と炎の中で、母は家の前の防火用水に半纏をぎぶんと浸し頭にかけて、祖母は私と弟が叫んでいるのに、隣の子供を私達と勘違いし手を引いて前を走っていった。

50メートル位離れたお寺の墓石の間に身を伏せた。頭すれすれに急降下しながらの機銃掃射、バリバリ、体のすぐ横を弾が走っていく。横を見ると焼夷弾から花火のような明かりがパッパッと降ってきて伏せている人間は機上から丸見えのようだ。石塔の下敷きにならぬよう大人達は「ごめんなさい。ごめんなさい」と倒していった。

それから数時間、爆音も聞こえなくなったので恐るおそるお寺の本堂に行ってみた。お寺の回廊を首のない赤ちゃんを背負い気が狂ったように叫び回っているお母さんがいた。横を流れる田川には炎

を避け川に飛び込んで亡くなり沢山の人が浮いていた。通っていた東国民学校に行ってみた。校庭いっばいに運ばれた死体が重なっていた。火をつけ焼きはじめていた。あの異臭は昨日のことの様に染みついている。学んでいた校舎の姿も無くなっていたのも少し経ってから気付いた。足元に真っ黒な炭の様になっている大小の母子らしい姿もころがっていた。

家族5人（父は出征し、満州からシベリアへ、私が高校生の時復員してきた。）留守を守っていたものの無事を確認、住んでいた家に行ってみた。建っている物は何も無い。何かが燻りチョロチョロと燃えていた。あの時の気持ちは筆には尽くせない。子供ながら立ってられない脱力感不安感に涙は出なかった。ただじっと立ちすくんでいた。誰も声を発することもなく。

後日聞くところによると早く目覚め、遠くに逃げた人々は遠巻きに落とされていた不発弾300発により命を失くしたり、防空壕に逃げ込み入口の木材の火災と煙に焼け死んだり市内で620人以上の人が亡くなった。

半日位しておにぎりの配付があるというので行ってみた。あの時のおにぎりの味は全然覚えていない。手に持ったら砂のようにくだ

けてしまった事は覚えている。

母は父^{しゅっせい}出征の後、子供達が助かったのだからまた今夜にも続いて来るかもしれない空襲^{くうしゅう}を恐れ、いつときも早く宇都宮^{はな}を離れねばと思ったそうだ。

翌日荷台付トラックで迎えにきてくれた。粟野町^{あわのまち}と栃木市の親戚^{しんせき}に分かれ引き取られた。母は罹災^{りさい}証明書をもろうため青空市役所に数日並びやっと後日栃木に来た。役所職員も居ず、台帳や用紙も無く、手書きのものをもらったという。

あと1か月終戦が早ければ家も焼かれず、仲の良かった友人達とあの宇都宮東校に居られたのに…。あれから50年経ち、ちりぢりになって住所も解^{わか}らぬ同級生が宇都宮に集まった。恩師が私の住所を調べ、高校の授業中栃木に会いに来てくれた。あのクラス会の後、毎月のように宇都宮には行っていたのに家のあった清水町には一度も足を向けられなかった。クラス会の後、思い切ってひとり見知らぬ人の住んでいる我が家の跡^{あと}に立ち止まった。筆につくせぬ思いが走った。逃^にげ込^こんだお寺に立ち寄ってみた。すっかり本堂もきれいになり、庭は幼稚園^{ようちえん}となり元気な幼児の声が響いていた。あの日と同じしとしとと雨が降っていた。これで私の本当の戦後が始まるの

だと思った。

負けて終戦。いろいろな情報が次から次へと入ってきた。米軍^{べいぐん}5、60機、対する日本機たったの2機という。宇都宮^{くうしゅう}空襲から終戦までの1か月間に37の街が空襲^{くうしゅう}にあったという。米軍の撒いたビラには「都市より退避^{たいひ}せよ」。ともあった。読んではならぬと回収を避^さけたのをとっておいたという。

身寄り不明の80体の霊^{れい}が共同墓地に収められ、現在も毎朝供養されているという。

ペンを置くにあたりユネスコ憲章の序文「戦争は人の心の中で生まれるのですから、人の心の中に平和のとりでを築かねばなりません」を全世界の人々と共に心に刻みたい。

◎ 体験談を聞いた千塚^{ちづかしょう}小6年生の感想文^{ぼっすい}を抜粋して紹介します◎

- ・ 戦争は、人の心を傷つける、大きな悲劇^{ひげき}をもたらすものだから、絶対にしてはいけないなと思いました。
- ・ 今回のお話を聞いて、戦争の本当の怖さ、平和のありがたさをあらためて考えさせられました。今、とても平和です。それは、戦争にあった方々が立ち直してくれたからだと思います。毎日、御

飯が食べられる。学校に行ける。このような一つひとつの「あたりまえ」に感謝したいです。

- ・ 今生きていて家族や友達がいて学校で勉強できることはとても幸せな事だと思いました。
- ・ 二度と戦争が起こらないようにするために、スミさんから教えていただいた話を自分の子や孫に語りついで戦争のこわさを伝えたいと思います。



市街地は焼野原
二荒山の山だけが目立つ



戦争の悲惨さのシンボル
枯死した宇都宮の大ケヤキ



千塚小6年生に戦争体験をお話ししたときの様子

「終戦の思い出」

若松義郎

私は父の仕事の都合で、母が妊娠^{にんしん}8か月のときに朝鮮^{ちょうせん}の新義州^{しんぎしゅう}に渡って、大正13年にそこで生まれました。新義州^{しんぎしゅう}の義^ぎをとって「義郎^{ぎろう}」と名付けられたわけです。

父は朝鮮人^{ちょうせんじん}を対象にした小学校で教師（校長）をしていて、2年ごとなど、頻繁^{ひんぱん}に異動がありました。それぞれの学校に宿舎があり、異動のたびに家族で移り住みました。場所によっては日本人学校のないところもあり、汽車で通学したこともありました。

中学校は平壤^{へいじょう}（現在のピョンヤン）にあって、寮^{りょう}に入っていました。平壤^{へいじょう}は日本軍の駐屯地^{ちゅうとんち}で、軍都として栄えていました。昭和12年、中学1年の頃は、真新しい軍服や武器を身に着けた部隊が満州^{まんしゅう}へ行くのを毎日のように見送りました。それが、しばらくするといつしか遺骨^{いこつ}を迎える日々になりました。さらに大東亜戦争^{だいてうあ}が始まると遺骨^{いこつ}を迎えることもなくなりました。その頃^{ころ}には遺骨^{いこつ}を拾っている余裕はなくなったということでしょう。遺骨^{いこつ}として受け取った箱に石ころしか入っていないこともあったようです。

中学を卒業してからは、京城^{けいじょう}（現在のソウル）にある鉦山専門
校に入学し、冶金^{やきん}（金属の精錬・加工）を学びました。1年生の頃^{ころ}は
勉強することが出来ましたが、2年生になると、学徒動員で鉦山のあ
る兼二浦^{けんじほ}（現在の松林^{しょうりん}）の製鉄工場へ行くことになりました。同じ
冶金科^{やきんか}の学生数十人が同じ工場へ動員され、会社の宿舎に寝泊まり
しました。宿舎は大人数が雑魚寝^{ざこね}する部屋で、作業は朝8時から夕
方5時まででした。お給料は全て学校へ送られ、学費に充てられま
した。

私たちは理科系の学生ということで、学徒出陣^{がくとしゅつじん}は猶予^{ゆうよ}されていま
した。朝鮮^{ちょうせん}にいる自分にも召集令状^{しょうしゅうれいじょう}が届いたらしいですが、母
が学生と申告して入営延期^{にゅうえい}となっていたようです。理系の学生は勉
学^{はげ}に励めとの国の考えでした。

そうして、21歳の時、工場で作業中に終戦を迎えました。朝鮮^{ちょうせん}
人の友人から、「義郎^{ぎろう}、日本負けたぞ。すぐに宿舎に帰れ」と言われ
ました。それで初めて終戦を知ったんですね。玉音放送^{ぎょくおん}は聞きませ
んでした。宿舎に戻ると日本人の友人たちは皆荷造りをして勝手に
実家^{もと}へ戻って行きました。私も急いで支度^{したく}をして汽車に乗りました。
街中に朝鮮^{ちょうせん}の国旗が一斉^{いっせい}に掲げ^{かか}られていたことに驚^{おどろ}きました。

両親と妹が新義州しんぎしゅうにいたので、新義州しんぎしゅうまで汽車で帰りました。9月に入るとソ連軍が戦闘状態せんとう しんこうで侵攻してきて、新義州しんぎしゅうで強制労働をさせられました。集落ごとに人数が割り当てられていて若かった私は毎日作業に出されました。ソ連は食糧難しょくりょうなんでしたから。シベリアへ向かう貨車に食糧しょくりょう（雑穀ざっこく、豆類など）を積み込む作業で、1人1日80俵びょうのノルマがありました。日本も国内の事で手いっぱい、外地がいちにいる何万人もの日本人には手が回らなかったのでしょう。引揚げの手続きなどはとられませんでした。朝鮮は38度線以南はアメリカの政治家によって計画的に引揚げひきあげをしていきましたけど、北のソ連の方は入ってきたのは軍人でしたから、ひどかったです。

また、日本人は朝鮮人にしばしば資産を略奪りやくだつされたり、家を追い出されたりしました。家を転々として、最後にはボロボロの小屋を修理して住んだ記憶があります。父は教師だったこともあり朝鮮ちょうせんの人との交わりが深かったため、日本人会の世話役をしていました。集落でのまとめ役や外との交渉役こうしょうやくなど色々頼られる存在でした。役所にも知り合いがいて、強制捜査そうさの予定などを夜中にこっそりやってきて教えてくれたりしました。そのおかげで前もってわかり、逃げることができました。私は軍人と勘違かんちがいされてシベリアへ連行され

ずにすんでいました。

昭和21年の秋、それでもやはり^{ねんれいてき}年齢的に軍人と間違えられるとシベリアへ連行されてしまう恐れがあったため、両親より先に日本へ帰国することになりました。^{しんぎしゅう}新義州から^{へいじょう}汽車で平壤まで行き、その先は^{かいじょう}開城（現在のケソン）まで約200キロを歩きました。そこから38度線を越え、アメリカ軍が用意した貨車で^{ぶさん}釜山へ行き、^{ぶさん}釜山からは日本政府から差し向けられた^{ひきあ}引揚げ船で^{はかた}博多へと上陸しました。^{はかた}博多からは^{ひきあ}引揚げ専用の列車で上野まで来ました。上野からの^{きつぷ}切符をもらう時に迷ってしまいました。生まれた時からずっと^{ちようせん}朝鮮で生活し、母の実家は1度訪ねたきりで、路線はうろ覚えでした。それでもなんとか母の実家にたどり着くと、^{おぼ}叔母にシラミがいるからと、家に入るまでに身ぐるみを^は剥がされ、^{せんたく}洗濯・消毒をされました。それからやっと家に入れてもらえたのですが、次の日からは早^{いねか}速稲刈りを手伝いました。

それから、両親と妹とも無事に再会し、私たち家族は母方の祖母が、近所に用意しておいてくれた土地に住みました。^{のうちいかく}農地改革による^{きょうせいばいしゅう}強制買収が迫っていたので、簡単なバラック小屋を建ててそこに住みました。お風呂はないので、ドラム缶風呂で、とても質素

な家でした。



仲の良かった朝鮮人の家族と一緒に撮った家族写真

本人は上段左

編集・発行

〒328-8686

栃木県栃木市万町9番25号

栃木市総務部総務課行政管理担当

電話0282-21-2342